

淨土

1980-11

第四十六卷

第十一号

昭和二十四年四月二十八日 创刊
昭和五十五年十月二十五日印刷
昭和五十五年十一月



念仏の輪を広げよう

—四十五周年に思うこと—

今春、とはいっても、春まだ浅い三月の初め、法然上人ご出家、修行の霊場である菩提寺に詣でる機会を得た。

菩提寺は、岡山県随一の高峰、那岐山の中腹、海拔六百メートルほどの山奥にある。夏

影もなく、深閑としたなか、残雪を踏みながらの参詣となった。

史実によれば、菩提寺は役行者が修験道場として開いて以来、四宗兼学の学問道場として、常に千数百人の学僧が修行していた、当

地方一の大道場であったという。したがって、法然上人が、非業の死をとげた父

菩提寺の公孫樹

時国公の遺言を守り、出家の道を選び、当時この菩提寺の住持であった叔父親覚得業をたより、この寺に來たつた頃も、堂々の寺構えであったと思われる。

ここでの六年間、法然上人は、どのような思いで修行されたのであろうか。思

案はつきない。おこがましい方ではあるが、上人と同じ年頃に父を失った私にとって、上人の心痛の一端を伺い知る思いで、境内のそこを歩き回った。

その証となるのが、本堂右手奥にそびえている、樹高四十余メートルにもなる公孫樹の巨木である。この木は誕生寺の公孫樹の親木でもあり、ともに天然記念物に指定されている。この公孫樹は、法然上人が、菩提寺に來たつた折、仏法興隆を祈念し、逆ささしにした枝が育ったものである。

法然上人が、この菩提寺から叡山に登り、やがて浄土宗を開き、このみ教えが、時を超えて広まり、念仏の輪が大きくなっていくのに合せるかのように年輪を増し、繁茂していったこの公孫樹。まさに念仏信仰流布の「生き証人」といえる。

本会も、新しい時代の念仏信仰運動を、と先達のたゆまぬ努力のもと、地道な歩みながら四十五周年を迎えるに至った。公孫樹の年輪に比べれば、ごく小さな輪ではあるが、これを機に、大きな念仏の輪ができるよう、さらに努力をかさねたい。

(長谷川宣丈)





— 法然上人誕生の図 — 松涛達文 画

十一月号・法然上人鑽仰会創立45周年記念特集号

目 次

—記念対談—

法然上人の世界……………藤井実応・佐藤密雄…(2)

特集 法然上人 行動と教い

積尊と法然上人……………石 上 善 応 ……(8)

善導大師と法然上人……………藤 堂 恭 俊 ……(12)

法然上人の教え

—聖道浄土二門篇から— ……戸 松 啓 真 ……(16)

夢多き法然上人の生涯……………玉 山 成 元 ……(20)

「念仏ひじり三国志」ノート……………寺 内 大 吉 ……(24)

法然上人のふる里・誕生寺あたり……………高 橋 良 和 ……(28)

法然上人の足跡をたずねて……………安 居 香 山 ……(32)

①②③④⑤……………(42)

〔藤井実応・稲岡寛順・江藤澄賢・宮本文哲・石井真峯〕
〔一条智光・金田明進・水谷幸正・真野孝信〕

法然上人鑽仰会……その足跡と展望

行運に当たった『浄土』の創刊……………村 瀬 秀 雄 ……(55)

鑽仰運動の展望……………竹 中 信 常 ……(60)

四先生の想い出

父・中村弁康のことども……………中 村 康 隆 ……(64)

真野正順の想い出……………真 野 龍 海 ……(67)

ありし日の父・佐藤賢順……………佐 藤 成 順 ……(70)

佐藤良智詩集より・若きいのち……………(72)

法然上人鑽仰運動へ一言……………(74)

〔飯田信弘・石井俊恭・上田祐規・漆間徳然・大橋俊有・小川金英・北川〕
〔一有・楠美知行・柴田敏夫・須藤隆仙・松川文豪・松濤弘道・山口壽存〕

<自選句鑑賞>勢至丸さまに寄せて……………一 田 牛 畝 ……(52)

<表紙のことば>さとり雑感……………土 屋 正 男 ……(78)

鑽仰会のあゆみ……………宮 林 昭 彦 ……(80)

<表紙裏・巻頭言>念仏の輪を広げよう……………長 谷 川 宣 丈

表紙 土屋正雄 ・ 口絵 松濤達文

記念対談



世界の上人然法

出席

大本山増上寺法主

藤井実応ふじい じつ おう

法然上人讃仰会代表

佐藤密雄さとう みつ お

司会 宮林昭彦

昭和十年五月に創刊された『浄土』誌は、本年はすでに四十六巻に入り、実は今春の四月号をもって、まる四十五周年を迎えたわけである。諸般の事情から、今号を「法然上人讃仰会創立四十五周年記念特集号」として 絵入り・増頁した本誌をお届けする次第である。その巻頭を飾って、増上寺御法主藤井実応台下と弊会同人代表佐藤密雄博士との記念対談を企画したわけである。法然上人讃仰会創立当初の思い出や、総じては、法然上人の念仏信仰の世界について語っていただいた。

司会 ご多用のところ本日はまことに申し訳ありません。丁度本年が、法然上人鑽仰会創立四十五周年ということでございますので、これから鑽仰会創立を当時のことどもや、法然上人の信仰世界について、色々とお話を伺いたいわけです。鑽仰会創立当初の昭和十年頃というのは、友松円諦師の真理運動、椎尾弁匡師の共生会、あるいは光明会等の近代仏教運動に即した新しい浄土教運動が盛り上がった時代でありました。ご法主は、当時はいつてみれば新進気鋭であったわけでしょうが、まずは



— 藤井実応 台下 —

じめに、その頃の思い出からお話し願いたいのですが。

藤井 昭和十年といえますと、私は宗立の布教講習所におったのです。そんなことで、創立の相談を受けたこともあるのですが、大正大学の真野正順先生、増上寺の里見達雄執綱、中村弁康教学部長、あるいは佐藤賢順先生などと発起人会が開かれまして、雑誌の題名などを決めたものです。当時は、友松先生の放送活動や、真理運動の雑誌の『真理』などもでていまして、色々と参考になりました。私に発会したようです。私は、何か、信仰相談の集まり「法然上人鑽仰の集い」などによくでたのです。とくに中村先生、佐藤賢順先生はご熱心でした。

佐藤 「一枚起請文」の講話や『浄土宗読本』などを企画して、中村先生や佐藤賢順先生は戦争中もよくもちこたえておられましたね。

司会 当時は真理運動をはじめとして、「釈尊に帰ろう」ということが叫ばれたのですが、鑽仰会は「宗祖に帰ろう」とか、「元祖に帰ろう」ということで運動を展開したと伺っていますが……。

藤井 あの時は、確か元祖さまとお呼びしていたようですね。法然上人の根源に遡って運動を進めようという

ことだったんですね。

司会 その頃、真野先生などが総本山知恩院の御廟で、新たな誓いを立てられたなどと、記録を見たこともあるのですが……。

佐藤 そう。丁度、『浄土』が発刊することになって、当時相当の資金を集められたんですね。ともかくあの時代は、社会主義運動などが盛んだったのですが、その中で仏教運動の旋風を呼び起こしたのは、何といっても法句道人友松円諦師の『法句経』の講義だったんです。それがキツカで、たとえば『般若心経』の高神覚昇なども登場して、朝のラジオ講座などを賑わしたんですね。その機会を捉えて、わが法然上人讃仰会が念仏思想を盛り返す気運を作ったんですね。とにかく真野先生、友松先生は同じようなグループで、協力し合いながら運動を展開したんですね。ともかく真野先生が昭和四年から続けられた「土曜会」、その塾頭だった佐藤賢順先生が書記官的な役割をしながら、中村弁康先生などと一緒に盛り上げられました。私などはいわば末輩の塾員で、ともかく、人材も結構豊富でしたよ。村瀬秀雄君とかみんなですね、そして当時の「サンデー毎日」の編集をしていた道

瀬幸雄君などと呼んだんですね。ともかく末香臭くもない、洗練された新しい雑誌『浄土』ができたんですね。東京駅の売店などに大きな宣伝の旗かなんかが掲げられてね。ともかく讃仰会の讃は、言ベンの讃ではなく金ヘンの「キリモミ」の讃で、決して浮わついたものではなかったんですね。

司会 信仰相談とかお別時も盛んだったようですね。

藤井 私なども箱根の別時道場によく参加して、お別時や座談、とくに色々な座談によって信仰を深めて行くといった具合でした。

佐藤 その担当が、確か佐藤賢順先生でしたね。いずれにしても、中村弁康先生の信仰相談は大変受けたようでした。その後は『浄土』の信仰相談コーナーを一手に引き受けられたようでしたね。なにしろ、光明会や共生運動も当時盛んになってまして、念仏運動が興隆したんですね。ともかく当時はまた、マルクス主義をはじめとした社会主義運動がすごかったわけで、仏教界もそれに対応して論理を張ったんです。木村泰賢先生や……、また真野先生なども、後年『マルキシズムに対する仏教の立場』としてまとめられたように、熱心に反論を下されたわけ



—佐藤密雄博士(左)と
司会者(宮林昭彦)—

です。そうした時代だからこそ、色々な宗教運動が活発に起こったんですね。あまり無事平穩の時には、そうしたことは起こりませんよね。

藤井 一面そういうことがいえるでしょう。ファシズムがでてくる、右翼運動が盛んという時でしたからね。
司会 相当な危機意識があったわけですね。
佐藤 そう。民衆も反面、保守的なもの、いわゆる仏教的なものに飢えていたんですね。

司会 ところでその当時というか、それより少し前とはなりますが、善導大師千二百五十年遠忌の頃はどうかだったんでしょう。

藤井 そうですね。千二百五十年の時にも、すでに仏教はかなり一般に注目されていましたが、善導大師に関しては椎尾弁匠先生がとくに「善導大師の全研究」を提唱されまして、今日の善導大師研究の礎えを固められたといってもいいでしょう。

司会 話が色々と飛びまして申し訳ありませんが、善導大師と法然上人ということで、本年はまた千三百年ということで、ご法主は善導教学にもご造詣がお深いわけなんです……。どうでしょう、ひとつ善導さまについて……。

藤井 まあ、本年は善導大師のご遠忌をつつがなく勤めさせていただいたわけですが、ともかく私は椎尾先生のお言葉にもありますように、「先勸大師発願帰三宝」にはじまる、あの善導大師の「十四行偈」、これをことさらに大切にいただいているわけです。いずれにしても、善導大師が生きた時代、あの南北朝から隋、唐にかけての社会的混乱の時代に、念仏信仰を確立されたお心を尊びたいわけです。

佐藤 ぼくは仏教の浄土教として一番興味をもっているのは、どうして罪惡生死ということになったか、ということです。また末法觀の影響ということもあったんではないかと、どうしておのれの罪惡ということに視点が行ったか、ということですね。それを法然上人が、まともに受け止められた価値があるんですが、とにかく罪惡觀のない仏教に、善導大師がどうして興味をもったかということですね。学問的にはこれはなかなかむずかしいでしょうが……。

司会 とくにまた懺悔の思想ですが、「念々称名常懺悔」という善導大師の姿勢は注目されますね。持戒堅固であるという上に、やはり時代ということもあったんでしょ

うね。

佐藤 時代の雰囲気、長安の街の雰囲気にしたものがあつたんでしょね。とくに最近注目されている、長安の宗教界におけるキリスト教の影響ですが、学問的にはなかなか証明もできにくいことでしょうがね。まあ「六時礼讃」などの言葉をみても、善導大師の姿勢は強烈ですね。

司会 ところで最後のコーナーで、最導大師と法然上人ということ、昭和五十七年のご誕生八百五十年ということとで、両先生にお話を伺いたいわけですが、ともかく私たちは法然上人の世界の中で生かされているわけなんです……。

藤井 私は法然上人の選択ということと、三昧発得ということに着目しているんですが、善導さまによって導かれて、三昧から出られたこと、それが「偏依善導」へと結びついて行くんでしょね。宗教的な意義としては、心の眼を開かせていただいた善導大師に、法然上人は全人格を投げ出されたんですね。これが法然上人の宗教な

んですね。ともかく「偏依善導」というのは、全人格を善導さまへあずけられたということ、これが法然上人の選択の世界だったんですね。

佐藤 まあ、法然上人の世界ということになれば、もちろん雑誌の『浄土』もそうなんですが、法然上人のお弟子たち並びに真宗や時宗の方々を含めて、ともかく念仏をお唱えしている人々をすべて、その方々が持つておられた念仏思想はすべて法然上人の思想であるということですね。だから一念義だとか多念義だとか、これらは法然上人の世界の中にみんな含まれ、摂め取られてしまうんですね。ですからね、浄土宗とか西山義とか、親鸞聖人の門徒とか、一偏智真の時宗とかに固まってしまっただけではないということですね。法然上人の思想は、もうちょっと大らかな念仏の受け止め方であるんですね。どのような人が、どんな時に唱えても、一声でも、たくさん念仏と心得て、すべてみんな法然上人の念仏の世界であるわけです。そういう考え方で行けば、「念仏の声するところすべてこれわが遺跡なり」というお言葉が表わすように、まさにこれが法然上人の世界ということになるんでしょうね。

藤井 まことにごもつともですね。ともかく浄土念仏の元祖が法然上人である、ということですね。念仏教を統一して、宗派とか何とかいうことではなく、すべてを摂めた、法然上人のお念仏の法門があったわけですね。お弟子たちもその後の人々も、結局は、ほとんど同じ浄土念仏の考え方なんです。

佐藤 そうでしょう。やっぱり法然上人の思想世界の中にあったればこそ、そこから色々な考え方がおのずから出てくるんですね。ともかく今日の視点で、末流のものたちが、私はこうだ、というのは、法然上人の世界を汚されるようにも思えるんですよ。いってみれば、法然上人の宗教の世界とは、日本人一般民衆の世界なんです。

司会 宗義とか教判というものを乗り越えたところの世界なんです。いや、まことにすばらしい結論ができたように思います。

本日は両先生、長時間にわたってまことにありがとうございました。



釈尊と法然上人

石^{いし}上^{がみ}善^{ぜん}応^{おう}

(大正大学教授)

釈尊が出家して六年の間、難行苦行に従事したことはあまりにも有名である。しかし、その苦行をどうして捨てたのであろうか。当時の聖者と呼ばれる人たちは苦行の結果、自分のいのちをなくしてもよいと決意していた。むしろ、苦行によって死に至ることこそ、本望であり、多くの信者はその崇高な死をたたえて聖者と呼んでいた。その中で、釈尊は食べるものも食べず苦行を続け、やせ細って死に至るのは、苦行者に対して聖者としての名声があっても、それはなんの役にも立たない。ごく普通の生活のなかで、多くの人びとに接してこそ、ほ

んものの道が開けるのではないか。苦行によって聖なる死に至ることはひとり聖者として崇められようが、多くの人びとのかかわりは何も残らない。そればかりではなく、生への真実の人間のいとなみは苦行によって、ひとり死に至るだけのものであってはならない。むしろ不完全なままの中でも、人間同志の完成が、この世の中で最高のものではないだろうか。生あるものにとってそれが最上の行為ではないだろうか。もちろん、修行はあくまでも自己の欲望にうちかつたためになさなければならぬが、求道者ただひとり尊しとする道ではなく、社会の

人びとと共に歩める修行者の道があれば進もうと決意された。そこで苦行を放棄し、口にすれば明らかに聖者としては墮落者というレッテルを貼られるのを覚悟のうえで、乳糜の供養を受けたのである。まさに百八十度の転回は乳糜供養のそのときに決定したのであった。いうなれば、当時の修行者の常道を捨て、新しい道を進んだことになる。難行苦行を捨て、人びとと共にある社会への道の中での実践を求めたといつてよい。

法然上人はきびしい比叡山に登ったが、そこでは多くの僧が学問と修行との一致をめざして、さまざまな修行に取組んでいた。伝教大師最澄がのぞんだ籠山十二年の行をはじめとし、回峯行もあれば、四種三昧のようなきびしい行も数えあげればきりがなく、用意されていた。法然上人も学問一筋にうちこんだのではなかった。伝記では法華三昧を行つたと記されているが、恐らくは念仏行のもとになった九十日間不眠不臥の常行三昧をもなされ、念仏して歩き通されたかも知れなかった。それらはみな凡俗な人間のできる修行ではなかった。また限られた僧のみに与えられた特権でもあった。これに対して、それでは一般の民衆はどうなるのであろうか。この

思いは法然上人の胸中を去来したことであらう。その目的から、經典を読み直したといつてよい。經藏にある經典類を五度も読み返した。觀經の註釈書なら、天台大師の著わした正統派のものがある。比叡山なら、むしろその方が当然であらう。しかし、それらには眼もくれず、善導大師の觀經疏を選びとられたのである。その教えに導かれて、墮落者といわれても決然として比叡山を降りたのであった。念仏易行への道を人びとと分かちあうためであった。どこでも、だれでも、いつでもとなえられる簡単な念仏を修行もしない人びと、救われなれと思つている人びとと共にとなえるために、法然は袂を分つたのであった。

釈尊も法然上人も当時それぞれ難行から聖者の道を降り、人びとと共に歩める、時代は違つてはいたが易行の道をそれぞれ進むべく、当時の修行者のもとを去るという点ではまさに同じ決断をされたのであった。この決断こそ、当時としては、どちらも伝統的なものに立ち向うほどの大変な決断であった。そこには、悩める釈尊、悩める法然その人の偉大な変革が生じたことを知らなければならぬであらう。

積尊はサンガと呼ぶ教団を組織して多くの共鳴する出家者を養成した。インドにはあの困難なカーストという階級制度があるにもかかわらず、サンガのなかにおいては身分上の上下の差別をまったく徹底してしまつたから驚異である。たといバラモン出身であつても、シュードラ（隷民）出身の者が先に戒を受けてお坊さんになれば、バラモン出身の僧は末席に坐り、シュードラ出身の僧は上席に坐ることになるのである。いや、そのような前身在が問われることはサンガのなかにはまったくなく、ただ、受戒して先に僧になつた者が上席であるという。そのうゑに、積尊もサンガの一員にすぎなかつた。問題がおきた場合は、サンガ全体で討議し、その是非を決するといふ、完全な平等主義がうちぬかれたのである。バラモン出身でなかつた積尊は權威を放棄することはできても、社会がそれを受け入れるか、どうかにかかつていた。それを実行したのである。このようにかつての身分の貴賤も、氏素姓の分らぬものも、平等に扱われたことはインド史上、まさに画期的な出来ごとであつたといふことは、だれしもが認めているところである。

法然上人が世間の注目を浴びる以前の仏教界は、出家

するものにも決して身分の賤しい者は許されなかつた。それに対して、法然上人の門弟は上級貴族の出身は少数で、その出身が明らかにすることができないほどに、身分が下層階級に属していたようである。しかも、法然上人の唱導した教えは、今までの仏教から閉め出されていた在家の人びとを、底辺の無智と認じている人びとを、仏の本願の念仏による救済の正客にすえたことであつた。

積尊の平等主義も、法然上人の名も無き人びとを仏の正客にすえることも、当時の常識をくつがえし、新風を吹きこむことだけではなく、ここにこそ、積尊の真髓の基調があり、それをまっすぐ法然上人は受けついでいたことになるのである。信の世界に貴賤の差も、身分の別も不必要のはずであつた。要はそれを知りつつも、その通りに実践し、それらの人びとの声を聞くことであつた。積尊は聞き、語り、これらの人びとによって、さらに円熟味を増していった。法然上人は下賤といわれる人びとの声を聞き、これらの人びとを仏の救済の光の正面に坐らせた。そこに積尊からまっすぐ法然上人に仏の慈悲が繋がり、縁起の思想が広がっているのである。確かに法

然上人は今までの仏教の行きかたとは別の道を行んだ。

何かもっともすぐれた仏に至る道であるかという勝負よりも、何かもっとも容易にたどれる道であるかを求めたといつてよい。法然上人の求道は難易という分けかたによつて、積尊に直参することであつた。その積尊も難行を捨てておられるのである。日本の仏教の流れでは伝統を無視しているかに見える法然上人の歩みは、じつは積尊の教えにまっすぐに続いているばかりではなく、積尊の教えである縁起の理法をみごとに伝承しているのである。そこには、はるかなる積尊と法然上人との見えざる出会いがある。

積尊は「怨みに報いるに怨みをもってしたならば、ついに怨みのやむことがない。怨みをすててこそやむ。これは永遠の真理である」と語つた。法然上人は父の遺言であるという「敵をうらむことなかれ」を実践した。通世者になつても、うらみはやはり消えさつていない。單純に消すことのできない怨みをこえて、敵をも救済の対象と化してしまう。その追求に法然上人の課題のひとつはあつたが、みごとに阿弥陀仏の本願を信ずることによつて、その道を示した。この意味でも、積尊の教えをそ

のまま実践した人といえるのである。このことを唐木順三は、とくに日本宗教史において時代を劃する事態であると力説する。

積尊はすばらしい弟子にめぐまれた。とくに舍利弗、目連という二人の弟子がインドで有名であつた。その二人を弟子にして、小国の出身である積尊は一躍、有名となつた。そのうえ、数々の信者をわずかの間に獲得していった。法然上人も鎌倉時代においては、あまりにもみごとに弟子たちを多く作りあげていった。柳宗悦は、そのすばらしさは特筆にあたひすると述べているほどである。

このように、相手に応じて話の仕方をかえて、わからせるように話す対機説法の仕方といい、理想よりも現実を重視した問題意識のありようといい、八十歳で共になくなるまでの積尊と法然上人との共通した点は、あまりにも多いといえよう。もちろん、環境も違えば、社会状況も、時代も違うところから、大きく相違したところもないわけではないが、その重要な生きかたは、ともに同じあゆみであつたと断言できるのである。

善導大師と法然上人



とう どう きょう しゅん
藤 堂 恭 俊

(仏教大学教授・文庫)

この私が、阿弥陀仏のお浄土に迎えられるという確信と喜びを持ちながら、このきびしい現実の世界を生きぬくことの出来るのは、念仏の元祖と敬慕され、浄土宗をおひらき下さった宗祖と仰がれる法然上人のおかげであります。その法然上人は「ひとえに善導大師ただ一人に依る」という態度、姿勢を生涯つらぬかれたのであります。

もちろん、法然上人による浄土開宗は、そうした態度、姿勢の上になりました。いうならば善導大師は、法然上人のお師匠様でありますから、お二人は師弟の間柄にある、というほかありません。一口に師弟の間

柄と申しても、今日では到底おしはかることが出来ないような間柄であります。

法然上人は八十歳のご生涯の前半において、寝食をとにした師匠を持っていました。父君が非業の最後をとげられてのち、九歳から十三歳まで、中国地方は奈岐山の中腹にある山岳仏教の道場菩提寺で、上人の母上の弟にあたる観覚得業くわんかくとくごうを師匠とされ、ついでその観覚のはからいによって、十三歳から十八歳にいたる間、仏道の最高学府であった比叡山の東塔で源光を師匠とされました。さらに十八歳から浄土宗を開創されるまでの二十

数年のあいだ、ご自身が選ばれた、西塔黒谷の慈眼房叡空に師事されました。

それらのお師匠様と法然上人とは、一対一の全人格をぶつけあつての、マンツウマンの教育がくりひろげられました。机を隔てた師弟二人が、同じ板の間の上に対峙し、師弟ともに仏道の最高世界をめざした、きびしい論義を、湿気と寒冷と貧困という悪条件のかさなりあうなかで進めることが出来たのは、師弟の双方が相手を信頼しきっていたからであります。

法然上人が経験された仏道を学ぶ場は、お師匠様から押しつけがましく教えられる、という一方交通的な教育でなく、むしろお師匠様に問いを投げかけ、解答をお師匠様からひき出す方向で教育が深められました。このことをとおして師弟の關係は一層強固になってゆきました。特に叡空上人と法然上人との間にかわされた問答に、その實際を伺つてみようと思います。

ある日、法然上人はご自身の日頃の研究成果を、師の上人に聞いていただかれました。時に師の上人は、ご自身のお師匠様である良忍上人から伝承された師説を楯にして、お弟子である法然上人の説を認めようとせず、

あくまでも師説に固執し、それを弟子に押しつけようとなされました。法然上人は血気にはやる心をおさえ、もはや問答無用とばかり席をはずして、自室にもどられました。ここにもものの根源をたずね、その根源をあきらかにしようとする法然上人と、お師匠様から受けついだ伝統的な説を固執する師の上人との、学問に対する姿勢に大きな落差のあることを認めなければなりません。ある時、師の上人は法然上人がご自身の考えをどこまでも主張されるのに腹をたて、つい高ぶる感情を制することができず、木枕を投げつけられたことがありました。そうしたはげしい感情の持ち主であった師の上人でしたが、やはり、ものの根源をあきらかにしようとなさる学生でしたから、しばらくの間熟慮されてのち、わざわざ弟子のところまで出向いてゆき、さきほど申されたあなたの考えは正しい、とさりげなく頭をさげ、ご自身の考えに非を認められたのであります。

法然上人がこのような稀にみる立派な師をお持ちになったことは、上人の生涯にどれほどプラスとなったことか、十分察することができます。しかしそうした学問に生きる師を叡空上人に見出し、その膝下に弟子入りされ

たのは法然上人その人でありましたから、十八歳の若さにも似ず、法然上人の人を見抜かれる偉大な洞察力に、頭のさがる次第であります。法然上人はこのような立派な師にめぐまれながらも、未見の、しかも異国の故人である善導大師の信仰、思想に傾倒され、その全人格を敬慕され、生涯「ひとえに善導大師、ただ一師による」という態度・姿勢を改められなかったのは、なにがそうさせたのでありましょうか。法然上人はお若いころから取り組まれた問題の解決を、叡空上人を始め各宗の学匠におたずねになっても、ついに解答をひき出すことが出来なかった程、大きい課題を持っていられた。この解きたい問いに対して、得難い解答をよせられた善導大師こそ、まさに法然上人にとって生涯の師匠でなくしてなんでありましょうか。

法然上人が仏道を学ばれた比叡山は天台宗の根本道場であります。当時の仏教はいずれの宗派を問わず、戒・定・慧の三学が仏道実践の基本であり、この三学のほかにさとりをひらく方法、解脱の道はない、とされていたのです。したがって、法然上人もこの三学を、完全にマスターすることを目指して、大いに努められました。

三学の最初の戒は、廃悪修善につとめ、さらに世のため、人のためにつくす、ということであります。法然上人はこの戒を持つことに努力すればするほどに、いかにしても廃すべき悪を廃することが出来ない自分、なすべき善をなそうと、いかに努めてもなすことの出来ない自分、世のため、人のために自分を無にしてつくそうとしても、どうしてもつくしきることが出来ない自分、という内省が上人自身にはねかえってくるばかりでした。そうしたことにお気づきになったということは、本当に現実のいつわらざる赤裸々な自分の発見というほかありません。法然上人も人の子でありますから、私たちと同じように、いつも心が散り乱れ、動揺して、なかなか容易に静止することができませんでした。仏道では三昧といって、散乱し、動揺する心を、ある一点に集中することによって、心の平静をたもつ禅定、三昧、定を実現することを重要視いたしますが、その定とても、生れつきの散り乱れる心のために、定を実修するたびごとに、定をまっとうできない自分に気づかされました。このようなことでは戒・定・慧の三学を、完全にマスターすることは出来ません。このことは、人間の性である煩惱に支配

されている自分、その煩惱に昼夜をわかつ振りまわされている自分から、どうしても脱出できない自分であることを、いやというほど知らされたのが法然上人で、上人自身はそうした自覚を「三学の器に非ず」と述懐されています。法然上人のこの悲痛な述懐は、望んでいる解説について、天台宗を始めとする八宗・九宗から見はなされた自分、つまり永久に解脱できない自分である、ということの意味しているのです。

悲痛な自覚を持たれた法然上人でしたが、しかし解脱する望みは捨てられませんでした。三学によって解脱できない、私のような三学の器でない者、人間の性である煩惱に振りまわされている自分、そうした自分がそのままで、解脱する道が必ずや開かれているはずである、と数年の間、日夜の別なく血眼になって、その道をさがし求められたのであります。その甲斐あって、その道を善導大師の著書である『観経疏』の上に見出されたのであります。一度ならず、二度三度とたび重ねて熟読され、善導大師のお示し下さっている南無阿弥陀仏とお名号を称える、という称名の一行を、飢え渴いた者が食べものを、水を食うように飲食するごとく修せられ、ついにこ

自身は、称名の一行によって解脱できるという確信を持つに至りました。そのうち、この称名の一行は自分独りの解脱の道でなく、必ずや万人の解脱の道でなければならぬ、ということに思いをこらす日暮しを送られていたある日の夢のなかで、善導大師にお出会いになり、尊いみ教えをいただかれ、称名の一行こそ万人のための解脱道である確信を深められたのであります。法然上人は「生身の善導大師にあいたてまつる」とご自身の心に焼きつけられた大師の尊容について述懐されています。

仏法は、法然上人を待って始めて、人間の性に煩らっている私たちの解脱の道となったのですが、そのことを導かれたのが善導大師なのであります。ある特定の限られた人たちだけの仏法が、すべての人の仏法へと一八〇度の回転が法然上人によって行われたわけでありました。この偉大なる回転をなしとげるまでの法然上人のむなしい心を、十分に癒し、導びかれたのが善導大師であるからには、善導大師に対する法然上人の接し方は尋常をこえたものがあって当然といえるであらうでしょう。それこそ、わが師「善導大師は阿弥陀仏の化身である」という法然上人お詞につきるのであります。



法然上人の教え

— 聖道浄土二門篇から —

戸^と松^{まつ}啓^{けい}真^{しん}

(大正大学教授)

人は誰れでも、自分のいのちが、唯だ一度だけのものであるならば、その人生をよりよく生きたいと思うであらう。昨日の自分よりも今日の自分が、今日の生活よりも明日の生活が、よくなりたいと思う。人はそれを幸福という。そうしてみると人間の生きてゆく目的は幸福にあるともいえる。これは普通一般人が誰れでも持っているまたは持つべき標準知力即ち専門知識でない一般的知識や理解力、判断力、思慮分別等でわかることである。このような知識とか理解力、判断力は常識といわれるものである。この誰れにでもわかることに従って生きるこ

と、即ち常識的な生き方が幸福（安楽）なのであると思う。常識ということばは日本語としては、古いものではなく明治時代に *Common sense* を哲学界で常識と記したのが始りであるという。フランスの哲学者デカルト（一五九六—一六五〇）によると、「常識とは心の健康な状態をいう」とのべている。このような考えからすると、幸福とは心と身とが健康な状態であることであり、それは常識的な生き方をすることによって得られるものである。私達もふだん、「それは常識から考えて正しい」というように使っているのであるが、それは誰れにでもわ

かつて受け入れられるから正しいということになるのである。

一般に仏教はむづかしいといわれるけれども、釈尊の説かれた教えの出発点は、決してむづかしいものではなかった。(人生の根本問題ではあるが)人間は生老病死の存在であることを、しっかりと認めることが基本であった。それはわれわれの迷いや苦しみが、そこからおこるものであるからである。これは常識から考えれば、誰れにでもわかることである。釈尊は悟りを開いて覚者となられたが、その悟りの内容は、いろいろと説き伝えられているけれども悟りというのは、苦を除いて楽な状態になることである。これは常識的な生き方が大事だということ教えともいえる。釈尊が三十五才で悟りを開いてから、それが心や身の病者の求めによりいろいろに展開されて八十才入滅以後には、その教えが記録されて仏滅後の百年頃には初期の經典となり、次第に小乗から大乘へと思想が発展して高く深いものになったのである。釈尊の教えの説き方は応病与薬といわれたから、滅後にもその教えが研究され討論されて特殊(別)の薬がつくられた。それは上等な薬であって、特別な病には非常によく効くけ

れども、よく効く反面、副作用がある新薬ともいえるものである。それは常識をはるかにこえた専門識でなければ、わからないものになった。中国の道綽禪師は『安樂集』上巻でそのような専門的な薬にたとえられる教えを聖道門と判釈したのである。

しかしながら、釈尊の説かれた諸仏の教えとして、次にあげる七仏通説の偈と云われるものが『法句經』にある。それこそ、釈尊の教えの共通的な普遍的な目的とみることができるのである。

諸の悪を作さず 善を奉行し
自心を淨む 是れ諸仏の教えなり

(荻原雲来訳『法句經』より)

私はこれを釈尊の説いた常識とみたいのである。釈尊の教えは、時代を経て発達し専門識でなければ理解しにくいものになったが、本来は常識であるものであると思うのである。ただ不思議なことに、常識という語はどの仏教辭典にもないのは、漢訳經典にもないのかも知れない。また、禪家の言葉としてよく用いられる「平常心は

道」なども仏道とは特別なものでなく、ふだんの心にある

とするものである。釈尊の教えが多くの生(老病)死の人間に常識で語られてこそ、よりよく生きる力となり、それを基本として日常の道德修行、信仰がいきいきた意義あるものになるのである。それは人生楽の世界といえるであろう。道綽禪師はこの常識による道を浄土門とし、専門識による道を聖道門とし、いずれも釈尊のとかれた勝法であるから、「教」の上からいうと勝劣がないとしたのは当然であった。しかしふりかえて、五濁にみちた現代(末法)の人間(われわれ)からすると、どちらを取るべきか明らかではないか。さらに道綽禪師の言葉は「何んぞ思量せずして都て去る心なきや」ときびしく続いている。法然上人はこの道綽禪師の仏教観に恐らく感激して、主著である『選択本願念仏集』の冒頭に、『安楽集』の上巻のこの個処をにかけて導入部、即ち選択本願念仏を導き出す大事な部分としたのであろう。本来ならば後文で偏依善導を標榜しているのであるから、『観経疏』の本文の教判論文でなければならぬわけである。これについて良忠、行観なども説をなしているが、要するに道綽のこの教判論が一番よく浄土教の本質をあらわ

しているからである。

さて『選択集』の一番中心をなす章段はどこかといえ、第三章段であろう。法然上人はここで、『選択本願の念仏』についてのべているのであるから、『選択集』の法体は念仏であり、この章が正宗分である。従って第一章と第二章は序分であり、第四章以下が流通分とみることが出来る。これは行観の見方であって、第一章、第二章を序分とみるのは、ちょうど念仏という御馳走(正宗分)を作るための料理のようなものであるといっている。それは仏教という材料をマナイタの上にのせて、聖道浄土、正行雑行と次第に料理して行き、やがて選択本願念仏という御馳走ができ上るようなものである。おいしい料理ができ上ったのは、最初の材料の料理法がよかったのである。さらに法然上人が『選択集』の冒頭に、『安楽集』よりの引文(問答)をもって書き出された第二の理由は、初めの八字である「一切衆生皆有仏性」にあったと思うのである。道綽禪師は『涅槃經』を学んだと伝えるから当然であるといえるが、『安楽集』上下二巻には多くの問答があり、その中からこの問答がえられたのは、単に二門教判がのべられているだけでなく、

人生(性)の肯定的態度を感じられたからであらう。この
ような心情は、法然上人の人間觀の根底を一貫して流れ
ているのである。かつて真宗の松野純孝氏が『選択集』
を読んで奇異に感ずることは、源空の語として、「厭離
穢土」とか「無常」とかいう言葉が殆んど見当らないこ
とであると言われ、「いったい源空の根源的な態度の一
つに、まず生きること、そして一刻でもよく生きること、
いわば、生きることを最高の道徳としたものがあつ
たようである」(雑誌『浄土学』第二十六輯)という考察は
的を射たものである。法然上人の『百四十五箇条問答』
などを読むと、この法然上人の明るい肯定的人間觀や人
生論を見ることが出来る。例えば、「生きてつくり候功
徳はよく候か。答、めでたしめでたし」「酒のむはつま
にて候か。答、ま事にはのむべくもなければ、この世
のならひ」とある如きである。このような法然上人の肯
定的凡夫觀を、『選択集』冒頭の道緯の文にみたのであ
るが、この肯定的態度は法然上人のすべてではないけれ
ども、一面あるいは根性であつて、それが法然上人の常
識であつたと思うのである。

……わたくしは思ふ。生きあるかぎりこの悲しみ、
刃(やいば)のやうに冷たい一切を耐へるところまで
耐へて行かう。もし死が恵まる日が来たら、その
時こそわたくしは静かに大往生を遂げることができ
るであらう。

一生を憤りと憎みの炎を燃やし尽したストリン
ベルグが死の床にありて「わが胸に十字架を置いて
くれ。そして寂しい山上の木の下に葬ってくれ」と
言つた最期の静かな心持ちもうなづかれる。わたく
しは過去の幸福な生活を感謝する。

来るべき孤独と寂寞の生活をも感謝する。

わたくしは今はじめて懺悔の生活のいかに苦しく、
いかに尊きかを知つた。死ぬことのいかに寂しく、
尊きかを知つた。

孤独な空を仰ぎつつわたくしは、今日も生きてあ
ることの寂しさと尊さをしみじみと感じる。

—吉田絃二郎先生の文章—

『浄土』第四卷正月号、

「寒椿咲けり」より抜粋)



夢多き法然上人の生涯

たま やま じょう げん
玉山成元

(大正大学教授・文博)

三論宗の学僧明遍は、法然の『選択集』を読み、偏執のきらいがあると思って寝た。その夜、大坂天王寺の西門に集まる沢山の病人や乞食に、一人の僧が鉢に入れた粥を匙で与えている夢をみた。あの人はだれだろうと尋ねると、あれこそ法然上人だと側の人が答えたところで夢からさめた。そこで明遍は自分の非を戒められたと悟ったという。法然が街に出て、乞食や病人に粥を与えたことはなからう。しかし乞食や身寄りのない病人をも極楽に導く救済の手をさしのべたことは事実である。こう

した万人救済の姿を、極楽に通ずると信じられていた天

王寺の西門に設置し、明遍が『選択集』を偏執と決めた非をわびたところにこの話の特色がある。明遍の心の移りを巧みにつかんだものであるが、その証拠を夢に求めたところに注意しなければならない。

これは明遍の夢であるが、法然の伝記の中には夢に関する記述がすくぶる多い。法然の母秦氏が懐胎したのも、剃刀をのむ夢をみたときであった。しかしその代表的なものは、夢中で法然が善導に対面したことであろう。承安五年の春、法然は黒谷の報恩蔵で『観経疏』を読み、浄土開宗へふみきただけに、この二相對面は大

きな意味をもった。そのときの善導の姿は腰から下は金色であり、腰から上は墨染の、いわゆる半金色の善導像であった。このカラフルな表現が深い意味をもつ。おそらく法然にとっては、弥陀と自分との中間に存在する化身と映ったのであろう。しかも善導の来現は、法然が専修念仏を広める貴い行動をとっているためという。そこには法然の自信がうかがえる。善導の来現はこのときばかりではない。建久九年、『選択集』を作ったときもそうであった。法然は死を覚悟した大病後のときであるが、「汝専修念仏を弘通するゆへに、ことさらにきたれるなり」という語を聞き、『選択集』が冥応にかなうことを悟ったという。九条兼実や弟子の要請とはいっても、『選択集』の選述にはかなりの決意が必要であつたろう。実際に『選択集』が仏教界に与えた影響はあまりにも大きかった。そのため善導の来現は、どれほど法然を安心させたか想像にあまりある。

法然が夢に見たのは善導だけではない。黒谷で法華三昧を行ったとき、普賢菩薩が白象に乗って道場に現われた話も有名である。やがて阿弥陀三尊の来現をみるよう

になった。いつからか明らかではないが、建久九年正月には三昧の境地に到達している。しかもバツと開けるのではなく、徐々にそれは深まっていた。そしてあるときは仏の面像が、あるときは弥陀三尊が、あるときは勢至菩薩の来現があつた。ことに法然は勢至菩薩の化身といわれた人だけに、勢至菩薩の来現は意味深い。叡山や南都からの弾圧の厳しい元久二年正月、靈山寺で行った別時念仏のとき、同席していた信空は、暗闇の中に光を見た。何となく気にかかったが、五日目の夜に行道したとき、勢至菩薩が同じ列の中に交って行道した。このことを法然に話すと、法然はそのようなこともあるといったという。この光明が勢至菩薩であることは、親鸞の妻恵心尼の場合にも見られる。

常陸ひたちの下妻で生活していたある夜、恵心尼は夢を見た。それは御堂の前の鳥居のようなところに二鉢の仏が懸けてあつた。一鉢は頭光のような光で顔は見えないが、一鉢は仏の顔であつた。何という仏であろうと尋ねたら、だれか知らないが、あの光は法然で勢至菩薩であり、一鉢は観音菩薩で善信（親鸞）だと教えてくれた。そこで驚き夢からさめてしまった。このことはだれにもい

わず、法然のことだけを親鸞に尋ねたところ、親鸞がい
うことに、夢にはいろいろな種類があるが、お前のみた
夢は正夢である。法然を勢至菩薩の化身として夢にみる
人は多い。勢至菩薩は智慧の仏で光として表現される、
といった手紙を娘の覚信尼に書き送っている。それにし
ても恵心尼には、法然が勢至菩薩の化身であるという先
入観はなかったし、夫親鸞が観音菩薩の化身であるとい
うことを口には出さなかった。

ところで法然自身が夢の中に現われる場合も多い。信
者の藤原範光が危篤であるというので、法然は偲んで訪
問された。そして後生のことをどう考えるかと尋ねる
と、範光は往生決定して疑うところがない旨を申され
た。その理由は、去夜の夢に一人の高僧が来た。どなた
かとたずねると、自分は源空（法然）である、唐では善導
と名のついていたが、此土では源空という。この世に来て
衆生を導くこと三度、今お前に命終の期を知らせるため
に來臨した。明後日午刻がその時であるといったとき夢
からさめた。だから自分の往生は間違いないという。こ
れを聞いて法然は非常に喜ばれた。範光はこの日時に
すこしも違わず往生した。これは範光に法然が臨終の時

刻を告げたものであり、ここには善導と法然とが一体と
なり、偏依善導を主張する法然の立場が明らかである。

不思議な夢として信空の場合も有名である。というの
は法然が『華嚴經』を講じたとき、青いくちなは蛇が
机の上におったので、法然は信空にとって捨てよう命
じた。信空はこの外くちなはがこわかったが、師の命
令にそむくことができないので、明障子をあげ、ちり取
りに入れて投げ捨て、障子をたてた。ところが返ってみ
ると、くちなははもとのところにおったので、全身に冷
や汗をかき、不気味がった。法然はこれを見て、なぜ捨
てないのかといったので、信空は事の次第を申し上げ
た。すると法然はだまって何もいわなかった。その夜信
空の夢に大竜があらわれ、「われはこれ華嚴經を守護す
る竜神なり、恐るることなかれ」というところで夢がさ
めたという。聞いてもぞっとする話であるが、現実にか
うしたことはありうることで、この不思議さと夢を結び
つけ、『華嚴經』守護の裏づけとした点に注意したい。
また法然が入寂するときや中陰のさい、貴族・武士・
僧侶・庶民にいたるまで、あらゆる階層の瑞夢が記され
ている。いずれも奇瑞が現実結びつく表現であるが、

これは法然の帰依層の厚さを物語るものであろう。それにしてもこの奇瑞や夢じらせは、古代・中世のものとばかり決めつけることはできない。数は少なくとも、そして公言されることは少ないが、現代でもよく耳にする。ただそれはすべての人に共通するものではなく、ごく身近な場合などにのみ知られる。そして科学的には今だに解明されていない。だから一概に夢物語といつて捨て去ることは妥当でない。

梅尾高山寺を開いた高弁（明恵）は、四十年間にわたって『夢記』を記している。好相を得ては忘れないうちに記したものであろうが、その内容の豊富さには驚くばかりである。高弁は理想とした兜率天に夢の中で往生したり、旅行中本尊に手紙を書くというように、夢と現実との区別がつけにくいほどである。一方親鸞は、建仁元年悟りを求めて叡山を下り、六角堂に百日こもって祈念した。そして五十五日目の暁に聖徳太子から偈文を授かった。感激した親鸞は直ちに六角堂を出て、後世の助かるという上人に会おうと法然を尋ねて面会した。この後百日間法然について法を聞き、随順の心を堅めたことは周

知である。このような回心は親鸞にかぎられたわけではない。文永十一年、一遍は伊予国浮穴郡菅生の岩屋に参籠した。この観音影現の靈地で靈夢を感じ回心にふみきっている。いずれにしても、こうした例を総合して考えると、中世における夢の比重がいかに大きいかがわかる。高弁ほど著るしくはないが、多くの僧侶が夢を大切にし、現実への裏づけとして行動している。

この時代の人々は夢を大切にしていた。ことに密教では修行の成就する相として喜こばれていた。だから仏教学を深く研究した僧侶は、夢相を大事にこそすれ、決して批難の材料とはならなかった。むしろ喜こぶべきことであり、現実と密接するものであったため、伝記や物語に多くの記事をのせたのであろう。それを疑問視するのは、長い時間がそうさせたことで、現代とは大きなへだたりがあることを考えなければならぬ。こうした観点からみると、善導、法然の二祖対面は、まさに浄土宗開宗を決定づける実証的な根拠といっても過言でない。そこには法然の尊い宗教的体験と強い自信がうかがえる。夢多き法然の夢は、今後大事に扱わなければならない。



「念仏ひじり三国志」ノート

寺内大吉
(作家)

○

鎌倉仏教——とりわけ法然浄土教は人間主体の信仰、思想だったと言えるであろう。大慈大悲の阿弥陀仏、そこには権威や畏怖から離絆した暖かい血が流れかよっている。絶対者にきわめて人間的な意志すら感ぜられる。阿弥陀仏のいつくしみと人間の慕仰、それはまさしく純粋な愛情関係であった。

となると、法然の巨像を把握するためには、いやその一端にでも触れたいと願うためには、多角的な人間面からなぞってゆく以外にあり得ない、と信じた。念仏ひじりを書きおこした意図がそこにあった。法然を神格化しようとする旧資料は、あえて避けてとおった。

ところで、当時の法然や門下の念仏ひじりたちの日常生活である。彼らは米塩の資を何に求めてきたのだろうか。

これを現代の僧院生活とダブらせて推量するのは誤ま

りであろう。法然自身は授戒師の声名があつてその面からの収入が期待できたが、門下のひじりたちは職業的な宗教者ではあり得なかった。

貴族や富者の庇護も考えられない。彼らは自身の手で生活を維持していたということになる。現在でいう在家ひじりである。

法然が比叡山の聖域を捨てて巷へおり立ち、きわめて人間的な宗教をひろめたという事実は、こうした在家教団の育成、活動によって、より強い歴史上の裏付けを持ち得るであろう。



捨筆（すてふで）という法師がいた。法然の嵯峨の釈迦堂での七日間の説戒があると聞き、仲間十数名をつれて乗りこみ、法然の説法中これを野次りまくった。

「斉料シヨウマウ」

と連呼した。

弟子たちが今は説法中だから、しばらく待ってとおさえたが、ますます言いつのる。とうとう熊谷入道がまか

り出て、

「僧クキ奴バラノ所行カナ。斉料イデ取ラセン」

とて懐中の一尺三寸の打刀を引き抜いて追い払った、と法然秘伝はつたえる。

その後、捨筆法師は前非を悔いて法然門へ帰した、とある。

この逸話にある「斉料シヨウマウ」だが、「斉（とき）を超越せ」ぐらいの意味であろう。飯をくれ、だ。

当時の状況と法然が説く内容を端的に物語っている、とぼくは思う。

法然は信仰の純粹さと同時に、健全な生活態度をも説いたのである。

念仏をせよ。しかし、働くことも忘れてはならない。在家者としての念仏行をすすめているのだ。

その働くということ、在家者の念仏を、念仏をすれば飯が食える、と曲解して、捨筆法師は「それほど功德を説くのなら、現実の斉を超越せ」となじったのである。

すでに本文でも書いたが、禪勝房は四条万里小路に住む聖道門の僧であった。法然の説教を受け、さらに一条

今出川の美女との悲恋を体験し、念仏ひじりとなったあとは遠江国で「番匠」に変身している。工匠として働きながら念仏教化につとめる。

いや、働きながら念仏するのではない。

禅勝房云く「故上人の教えあり。たとい余事をいとなむとも、念仏ししこれをする思いあるべきなり。余事をしし念仏せんと思うべからず」——「一言芳談」

なのであった。

その念仏教化だが、念仏ひじりと信者という階級差別でこれをとらえると、数々の誤解が生じてくる。法然はあくまでも、僧俗が同一の立場に立って、差別のない念仏をとなえることを教えたはずである。同唱十念である。

法然は日課として毎日七万べんの念仏をとなえたという。これを法然が一人だけでとなえたとは解すると、時間的な矛盾が生じてくる。説法などしている時間がなくなってしまう。

東山の吉水にいた内弟子たちとの同唱念仏、と考えるべきであろう。六人の内弟子がいたとすれば、日に一万べんで日課を果たし得ることになる。

吉水の禅室には年ごとに弟子が数を増し、房舎も増築していったらしい。こうして増員してくる弟子たちと、朝晩にとなえる念仏の輪こそ、法然が求める大衆教化の結晶であった。

吉水に住むひじりたちは、「没後起請文」がふれる高島ノ一所などの畑地を耕したり、さまざまな勤勞にいそしみながら、念仏する法悦のなかで生きていたにちがいない。



ところで法然は、九条兼実をはじめ多くの貴紳や女人を授戒している。兼実の日記「玉葉」によれば、病んでいる夫人が授戒し、これで病氣も快方に向うであろう、と書いている。この文章に関する限り、法然は一箇の祈禱師もどきである。

今日、法然像を探究るうえでもっともまどわされるところであろう。あれほど聖道門を否定し去った法然がなぜ授戒などを。

ぼくはこれを淡白に受けとめたい。余事なのである。

禪勝房が木工をなりわいとしたように、法然もまた比叡山時代に修得した授戒を、生活の糧として消化していたのではあるまいか。

これは現代の念仏僧たちが、葬儀や法要をつとめることと共通していると思う。働くのである。いささかもうしろめたく感ずる必要はないはずだ。

ただし、たとえ余事をいとなむとも、念仏ししこれをする思いあるべきなり、余事をしし念仏せんと思うべからず、である。

念仏しし法然は授戒という余事をいとなんだ。ぼくらも葬儀をやりながら念仏しよう、などと思ってはならないのである。

現に法然は、さらりと言い流している。

正行房という弟子が、関白九条邸へ出入りする法然の行動に疑問を投げかけた。夢の中でだが、法然は淡白に兼実公とは前世に浅からぬ因縁があったので、と言いつつのである。

正行房の疑念は現代のわれわれにも継承されるわけだが、「念仏しし余事を……」と解明していいはずである。その正行房は、従来全く正体不明な門弟とされてき

た。ところが法然七百五十年御忌の直後、奈良の興善寺から法然直筆の書状が発見された。その所有者が何と正行房だったのである。

この正行房と九条家への出入りに不審をいだいた正行房と同一人物かどうか、実証はできないが、書状の裏面にある念仏ひじりたちの交名状や文中の熊谷入道直実にふれた部分などから、彼に近い念仏ひじりだったと断定できよう。

法然からもらった書簡で両親の遺灰をくるみ、阿弥陀仏像の胎内へおさめ、八百年近くも経た後に世に現れるなど、歴史の恐ろしさを教えられるとともに、法然という巨像の不変性に、今更ながら驚かないわけにはいかない。

伝来このかた、この国の呪術性と習合した念仏を、仏と人間との愛情関係へひき戻した法然念仏――

ぼくは「念仏ひじり三国志」を書き綴りながら、資料をあさるたびに紙背からつねに教示を受けたものだ。こんな仕事をさせてもらっていること自体に、限りない幸福感を味わっている。



法然上人のふる里・誕生寺あたり

高橋良和

(児童文学者)

はつきりいって四十八年前である。

それは法然上人のご誕生八百年の年であった。そのときには、浄土宗の児童協会という日曜学校や子供会をやっている団体の連合体があった。その協会で法然上人ご誕生の記念のために、上人の九歳のお姿を銅像として残そうということで、全国のそうした団体に呼びかけて十銭の募金をしたのである。十銭である。まちがってもらっては困るので十円ではない。全く子供のこずかいを寄進してもらう運動である。

当時このような運動は、どの宗派にもなかっただけ

に、関心は高く、またたくうちに目標額があつまった。

そしてあの知恩院の古門前から入った華頂学園の前に建てられたのが、わたしたちの「勢至丸さま」の銅像である。御年九歳の銅像なのである。

そのとき知恩院の華頂会館で、全国子供大会が開催され、日本中の著名な銅像で、子供に関係の深いもの八つを選らんで、銅像八景という、今でいうバレー式な内容のものを発表したのは、つい昨今のような気がする。あれから四十八年はすぎた。

そして昭和五十七年に迎えるのが、法然上人のご誕生

八百五十年である。わたしには、八百年とそして八百五十年を迎えることが出来るのはほんとうにうれしい。

上人の出生地の岡山県の久米南町の誕生寺へは、年に何回かお参りをかねて調査に出かけている。いつ出かけていっても、この寺では心がおちつく、やはり上人誕生の聖地であるからであらう。

何年もかけて誕生寺の周辺を歩き、そして調査しているうちに、いろいろな珍しい資料があることを知った。

上人の誕生の際の奇瑞は、偉大なる人物の出生のときに生ずる一つの現象であると思うが、あの境内を流れる片目川のほとりの椋の木の枝をみあげながら、上人の誕



―旅立ちの法然上人像―

念仏の元祖、法然上人
のその行動と救いの生涯
の第一歩は、ここからは
じまる――。

生のあの両幡椋の天くだったこと思い出した。椋の木は早や二代目であらう。

この誕生寺は、当時法然上人の父である漆間時国の邸宅のあとといわれている。そういうことから、この誕生寺の本尊のあるあたりか、上人の誕生の場、すなわち母上の出産の部屋であるとなつたえられている。

さてこの出生のところに上人の伝記の四十八巻伝をみると、そのとき母上は、屏風をうしろに坐っている図がある。不思議な出産の風景である。

先に知恩院の和順会館から、山上の御影堂の長い廊下に描かれた馬堀喜好画伯の絵の制作のときに、上人の一生の伝記と、その資料や風俗を調べることをお手つだいをしたときである。

四十八巻伝の絵のことを調べているときはからずも、当時の出産は坐産であることがわかった。なるほど、それであつてこそ四十八巻伝のあの絵の様子が納得出来るのである。

するとこの出生のときに椋の木に二流の幡が木の枝にかつたというのは、おそらくこの椋の木は、時国の邸宅の庭であつたのだらう。

ところが上人の出生の地について美作国久米南条稻岡庄と史実にはつきりしているのに、珍しい資料を紹介してみることにする。

それは福岡県筑紫郡下見というところに、上人の両親である漆間時国夫婦が住んでいたということである。そんな史実は無いことははっきりしている。

しかしそれが記載されているのである。それは日本の民話のなかの「福岡の民話」である。そこに下見という場所に、赤池という池があったという書き出しである。民話は、ほとんど古老から聞くのであるが、この老人は、瀬川フミ子という人であって、この民話では、「赤池のサギ」となっている。

その話のなかでは、漆間時国の夫婦は、白鷺であると書いている。一匹のフナを救ってやったことから、智弁上人の化益をうけ、白鷺を人間として生まれさせてもらった。その人間が時国夫婦であるという。

この赤池は、土地の古老から聞くと、宝満川の西岸にある田圃のなかにあったということで、ここに阿弥陀堂があったともいわれている。

人間に生れた時国夫婦が、九十九日目に妻に男の子が

やどったといわれ、それが勢至丸、後の法然上人である。この民話ではつたえている。

その後この民話をさらに裏づけるような楠の木があったことや、その楠の木の下に梵字の碑があることもその後わかった。

また上人の母上が、岩間観音に祈願をこめたことも、この地では勢至菩薩に祈願したとある。この伝説の根拠は、これ以上はつきりしない。一人の人間のいろいろな面を知るとは、バラエティがあつたのしい。この伝説からすると、時国夫婦は、勢至丸を生んだ後、美作国に転動しているということである。

とんだ資料を発表してまどわす危険性を感じるが、伝説はたくさんあるほど、その人物の人間性が味わえる。

上人は、美作で生まれたことには、まちがいが無いが、このような九州にも上人の出生のことをつたえる伝説のあることを紹介したまでである。その真憑性は、これからしてほしい。

上人出生の際に、時国夫婦が神仏に祈願したことをつたえているが、その仏とは、岩間の観音であり、今の棚原町の天台宗の本山寺がそれである。

この寺は、誕生寺から近いように思うが、自動車でも三十分以上はかかる。当時この観音に祈願されたとなると、おそらく女性の足では大変であろう。

歩いてでも無理である。そこでこの岩間の観音の参拝口に、灯明の松というのが残っている。

法然上人の母上が、この灯明に灯を献じて子供のめぐまれることを願ったのであろう。とても坂をのぼらなければならぬので、この参道の入口で灯明をともして祈願したので、そこに灯明の松もある。また岩間の観音の境内に「さか木の桜」というのがあって、もし子供がめぐまれるなら、このさくらの木の枝を地面にさし込んで、木が育つようにと、祈念している。そのさくらの木も、二代目が残っている。なにかしら上人の母上の真実な心をつたえているようである。

そして神仏の仏というのは、この岩間の観音であるが、神さまのほうは、それこそ誕生寺から近い北山神社というのであることも歩いてみてわかった。

社殿が立派に新築されているし、小じんまりとしたなかなか立派な鎮守さまである。

最近特に、誕生寺周辺で注目をうけるのは、中央町表

木にある「仰観の灯」という灯明である。わたしが紹介してからたずねる人が多くなっているのはうれしい。

母上が、勢至丸を比叡山に送ったあと、この灯明にあかりをつけて比叡山のをむいて、毎日祈願したのである。ここなら誕生寺からはすぐいける。

その昔、石がくずれて田圃のなかにばらばらに散らばっていた灯籠を、再び組みたててくださったのである。国道からかすかにこの灯明がみえる。たまらなくなつらしく、母と子の美しいすがたを思いうかべてほろりとするのである。

その五十メートル東にある勢至丸の訣別の地にも、小さなお堂が建てられている。これもありがたい。

生誕八百五十年のよき年には、この周辺に何日も滞在して、わたし一人でもその遺跡を案内したいと思っている。

そしてこの灯明の近くにある時国やかたという名のところも、おそらく時国のつとめる役所のあとであろう。

一つ一つが縁りのあるところである。誕生寺周辺は、浄土宗の人々にとっての心のふるさとであろう。



法然上人の足跡をたずねて

やす
い
こう
さん
安居香山

(大正大学教授・文博)

一、祖師の足跡を踏む

法然上人の末流を汲む一人として、祖師の足跡を尋ねることは、祖師に直参する一つの道である。私はかつてルナンがイエス伝を書いた時、自からクリストの遺跡を自分で歩いた上で書いたという事に、深い感銘を覚えていた。そして、いつの日か、法然上人伝を書かぬまでも、せめてその足跡を自分で歩いてみて、その鴻徳を慕いたいものと思っていた。そして、そのチャンスが、思いがけずにやってきた。

浄土宗新聞が、二十五霊場めぐりを書いてみないかと言ってきた。私は、これこそ上人のお導きと快く引き受けた。二十五霊場は有名な寺が多いため、その気になれば、いろいろの資料によって、机の上で書くことができた。しかし私は、この機会に自分で足を運ぶ、上人が踏まれた土を踏み、上人が歩かれた道を歩き、上人が坐られたその場所に坐って、祖師教化の道を辿ってみようと決心した。またそれは、交通も発達し、場所もそれ程広くない地域とて、難なくやれるものだとやすく引き受けた。

事実、多くの霊跡が京都市内、或いは近郊にあった。私にしてみれば、月に二、三日は京都に行くので、その機会に一寺ずつこなしていけば、月一回の原稿などたやすうと考えていた。そして、京都近隣から片附けながら、時には遠隔の霊跡を求めて、巡拝を続けた。しかし、次第にこの事が、大変な仕事であることが分ってきた。第一、京都及び京都近郊と言っても限度があり、次



— 知恩院・阿弥陀堂 —



— 百万遍知恩寺祖廟 —

第に遠隔の地が数多く残り始めてきた。それに多忙な日常の事とて、そう簡単に旅にもでられず、それでいて一月一篇の原稿は必ず入れるという苦難が、ひしひしと迫ってきた。そして、半分位こなしたところ、二十五霊場巡拝が、どんなに大変な事かということ、身につまされて味わうこととなった。

しかし辛い事に私は、その間大した病氣もせず、とも角二年がかりで、無事二十五霊場の巡拝を、月輪寺を最後に終える事ができた。それは私にとって、二度と生涯にできないと思われる有り難い体験であった。そして今度のように法然上人の教化の跡を辿り得た喜びを感謝をもって味わうと共に、交通も登達しない鎌倉時代に、上人はさぞや苦勞せられたことであろうと、身を以て体験した。



— 四天王寺・六時礼讃堂 —

その間いろいろな事があったが、何と言っても、意外に浄土吉水の流れを汲む人びとが、二十五霊場にお参りをしていないという事実を知り、これはまことに祖師に對して申しわけない事であると、つくづく感じた。霊跡廻りについて言えば、真言宗の人びとが、親鸞上人の霊跡めぐりと共に、法然上人の霊跡めぐりをしている事実に驚いた。霊跡廻りの多少が信仰の深度の厚薄をあらわすとは思わないが、何か一步先んじられているようで残念でならなかった。善導大師の千三百年遠忌を迎え、遠く中国に霊跡めぐりをわれわれはしているが、それにもまして、法然上人の霊跡めぐりをもっと活潑にして、祖師に直参すべきではないかというのが、今のいつわりのない感懐である。

二、他宗に守られている霊跡

私は当初、法然上人の二十五番霊場はすべて浄土宗のお寺であると、極めて常識的に考えていた。ところが意外にも、半数近いものが他宗派の寺であった。そして、私自身浄宗会発行の「霊跡巡拝の栞」を頼りに歩いたのであるが、毎年のように行っている場所に、霊跡があ

り、その事実を全然知らなかったという、私の無知と、無関心さに、今更のようにあきれた。例えば清水寺の舞台のさし向いにある阿弥陀堂、或いは東大寺の大仏殿の隣りにある指図堂さしずどうなどがそれである。清水寺など数え切れぬ程の回数を訪れながら、ついぞこの事に気がつかなかったなど、法然上人はさぞやお怒りになっていることがあろう。人格ご円満な上人の事故、そんな事で怒って

おられるとは思われないが、吉水末流の一人としては、本心に申し訳けないことで、阿弥陀堂や指図堂の上人の前で、深々と頭を下げてあやまってきた。

清水寺にしても、大仏殿にしても、いずれも法相宗、華嚴宗という日本では珍しい宗派の寺であり、余りにも名高い。その名高い他宗の寺が、大切に法然上人をお祀りし、ご苦勞され



—東大寺・指図堂—

ているのを見て、身の引きしまる思いを何度かした。指図堂の住職は、大正大学の出身でもあったため、私の参拝を快く受けて頂くと共に、いろいろとお話しを伺う機会を持った。指図堂は、大仏建立の勸進職であった重源が、指図をしていた堂の跡である。法然上人と深い関係にあった重源の事とて、上人もきっと此の地に立ち寄られたに違いない。それ故にこそこの堂が、霊跡の一つとなっているのであるが、考えてみればこうした縁で、これを上人の霊跡として、他宗の方にお祀り頂いているということは、何としても有り難いことであった。

西山浄土宗の寺が霊跡となっているのは、粟生の光明



―勝尾寺・二階堂―

寺の外、京極の街中にある誓願寺、和歌山市の報恩講寺などがあって、これも他宗には違いないが

浄土宗とは兄弟宗であり、しかも法然上人の末流ということであってみれば、それ程に異とするには足りない。

しかし、清水寺や東大寺の外、箕面市にある勝尾寺の二階堂や、大阪の四天王寺の念仏堂、さては、愛宕山の中腹にある月輪寺なども、他宗によって護持されている。勝尾寺は古義真言宗であり、四天王寺は天台宗の和宗であり、月輪寺は天台宗である。二階堂を訪れるとき、私は勝尾寺がどんなところか知らなかったため、案内書によって予め電話を試みた。そして、いつでも詣りできるかを尋ねたところ、いつでも門はあいているからどうぞということ、でかけて行なった。

ところがさて行ってみると大変な寺で、古義真言の本山格の寺である。その寺域の広大さと、七堂伽藍の立派さは、驚くばかりであった。門があいているかなと尋ねることが失礼千万なことで、全く私の無知に恥じ入った。二階堂はその中の一小堂で、上人七十六才のご老令で、配流からの帰途立ち寄りられ、京都帰還の機を待っておられた霊跡である。

大きな立樹に囲まれて薄暗い小堂は、いかにも上人の苦悩のほどが察せられ、八百年前に思いをはせて、感涙

を催した。それでも上人は、そうした苦難にもめげず、ここで教化の法筵をはっておられる。不退転の、祖師のたゆまぬ努力の跡を知る思いであった。

四天王寺の念仏堂は、立派な建物で、池に面した景觀の地にあった。四天王寺全体が立派に整備されていることもあって、古めかしいこの堂も、勿体ない程の靈跡であった。しかも堂に掲げてある額には、「六時礼讃堂」としてあり、何か浄土の寺を見る思いであった。六時に諸仏礼讃をするので、六時堂ともいわれるという事であったが、善導大師の千三百年遠忌ともからんで、感慨深いものであった。四天王寺の三大会の一つである聖靈会は、この堂が行われるということであった。

三、配流の地を辿る

私の巡拝行路は、決して順を追った体系的なものではなかった。その時の都合と、出張の間をぬっての旅であった。しかし終り頃になると、そんな事は言っておれず、わざわざ出掛けることが多かった。上人が配流の身となられ、讃岐に行かれ、そして許されて帰られる道すじも、私の旅はバラバラであった。しかし、点を辿りなが

らも、それらの寺の参拝は、他の寺とは違う緊張感を持つた。

高砂市にある十輪寺は、今は西山禅林寺派に属しているが、上人が配流の途次立ち寄れた靈跡であった。暑い夏のさ中に訪れたこともあって、その印象は強く私の脳裏に残っている。準本山格であるこの寺は、なかなか立派な寺であった。そしてはるばる訪れた私を、住持とそのご子息が、懇ろに案内して下さった。重層の本堂は、いかにも上人の靈跡にふさわしかった。

配流の身でありながら、むしろその配流を朝恩と感じ取り、辺境の地に教化の道を開くことに喜びを感じつつ、遠い地に行かれた上人には、並の人とは違った偉大さがそこにあった。ここでも、漁夫の八田治部太夫婦を教化された。魚を取って生活していた太夫は、殺生の戒を犯している身を思い、果して往生ができるものかと尋ねた。

「念仏さえ申せば、たとえ魚を取っていても必ず往生できる」

確信に満ちた上人の教えを受けて、二人は念仏行者となつて往生した。二人の墓は、今も本堂脇にあり、真新

しい塔婆がそなえられていた。

尼崎市にある如来院も、配流にからむ靈跡で、この寺は遊女を教化されたということで有名である。ここでは五人の遊女が、罪深い身をなげいていたが、上人の教化を受けて喜び、入水往生を遂げたという。悲哀に満ちたこの物語りは、今も遊女塚としてその影を止めている。上人と女性との関係についての話は、極めて少ない。



—十輪寺本堂—

それ程に女犯に縁のない上人であつたのであるうが、持戒堅固の上人にしてみれば、当然のことであつたかも知れない。それにしても、配流の途次、遊女を教化されたということは、上人一代の伝記上、光彩を放つ出来事であつたことは、否定できない。

巡拝の途次、いろいろと私を驚かせた事があつたが、如来院を訪れたとき

も、その一つであつた。住持が大阪大学文学部の教授であつたことも、驚きの一つであつたが、それ以上に、本



—如来院・法然上人像—



—十輪寺・八田太夫夫妻の墓—

堂を参拝した時、柱に掛けられてある聯が、実は私の師匠の林彦明大僧正のものであつた。ある。「弥陀身色如金山」相好光明照十方」と、金色あざやかに彫り込まれた筆跡は、まぎれもなく

大僧正のものであった。師匠の字は雄渾で右肩あがりの達筆であったが、その筆跡は、生のままよく刻まれている。た。

第八番霊跡になっている報恩講寺も、忘れ難い印象を、私の脳裏に刻んでいる。和歌山市の大川町という事で気軽にでかけたのであるが、意外に遠い町はすれの町であった。南海電鉄の「みさき公園駅」で多奈川線に乗り替え、終点多奈川から更にバスで終点の大川に着く。そこから報恩講寺までは、海岸線ぞいに二十分程歩いた、全く町はずれの漁村にあった。その道は、海岸一杯に張りだした岩の横を、海沿いに造られており、昔はこの道さえなかったのではないかと思われた。

この地は、上人が讃岐より帰られる途中、風波に押し流されて漂着された霊跡で、いかにも寂しいところで、さぞや上人も驚かれたことと思われる。今でこそ住宅も立ち並んで、小さな街となっているが、その頃はほんの数軒の漁家があっただけではなかったであろうか。そして、漂着した舟は、再びここをでて、大阪方面に向ったのではなからうか。承元二年（二〇八）上人七十六才のご老齢であったことを考えると、その御苦労は察するに

余りがあった。私は海岸にしばらく立って、茫然とあたりを見まわしていた。

報恩講寺は今は西山派に属していた。そして、寺そのものは随分古く、毀れた所などもあったが、立派な山門や、重層の本堂が狭いところに建っていて、往時の信仰の強さを偲ばせた。この寺は、通称「円光さん」と親しまれて、上人の遺徳の偉大さが想像された。上人の化導は、ここでもねんごろに行われたわけである。

昭和五十四年の春、私はこの寺を訪れたのであるが、住職の中西締全師は、なんと九十六才のご高齢であった。そして、私の訪れたのをこの上なく喜び、永々と上人の一代記を語り、この寺での上人の教化を語り続けた。二十五霊場を参拝にくる人びとにこう



— 報恩講寺 —

した説教をするのが、老僧

の最大の喜びらしく、紫の衣を着ての長広舌であった。その話は、殆んど私の熟知している事であったが、私は敢えて堪えて、この話を聞いていた。それはこの老師に對する礼儀でもあったが、何かそこに法然上人のおぼろげな姿を見てとったからであった。

幸い、老住職が自動車を持っていて、私を多奈川駅まで送って下さったので大助りであったが、この寺の巡拝は、生涯忘れることのできない一つとして、その記録に止めておきたい。

四、最後の登山

二十五霊場を廻る中で、最後に残ったのは月輪寺であった。これは何としても愛宕山の中腹で、険しい道と聞いていたので、氣候のよい折を見て、誰かに案内してもらおうと思っている内に、とうとう最後になってしまった。しかも原稿を締め切る二月下旬では、とても登山不能という事で、一回分は、二十五霊場に入っていない鳥羽の一念寺のことを書いて時間をかせいだが、三月にはとうとう決行せねばならぬはめになった。

幸い、大正大学玉山成元教授が同道することを了承さ

れ、よい伴を連れての登山とあいになった。仏教大学の自動車にお世話になって、山麓の清滝まで行き、更にそれから細い道を二キロ山裾にまで行く事ができた。それから厭でも足で登山である。仏大の運転手さんも、山登りに同道してくれた。

幸いこの日は、春には暖かすぎる位のよい日よりで、一枚二枚と着ているものをぬぎながらの登山であった。道はいかにも急で、岩肌のみえる山道であった。身のこなしの上手な玉山教授は、とんとんと登ったが、私にはなかなかの難登山であった。力のある運転手君も、とっとと登って行った。しかし、二キロの山道は、いかにも私にはよい修行となった。

一瞬山が開けた。そして彼方に月輪寺が見えた。私の苦難はここで一辺に消えた。山道を切り開いたような所に、月輪寺は建っていた。天台宗に属するこの寺は、法然上人の外護者であった月輪殿、九条兼実公が隠棲したと伝えられる上人ゆかりの地であった。果して上人がこの山の上に、兼実公を訪ねられたかどうか、史実の程は別として、とも角、この寺に巡拝できたことを、私は喜んだ。



—月輪寺—

詠歌となつてゐることも、

ここには三祖堂があり、法然、親鸞、兼実の三氏が祀られていた。そして、この住持も、私達の来訪を歓迎し、座敷に案内しての説明であつた。なんでも四月十六日以降、毎日この寺で説教をし、多くの参詣者でにぎやかであるという。そして、住職は、その説教のままに、ここでも長い時間、上人の一代記を拝聴した。それは、この寺に住む人にして始めてできる説教と感じ入つた。

月影のいたらぬ

里はなけれども

眺むる人の

心にぞすむ

この歌がこの寺の詠歌とされている。それはいうまでもなく、宗歌となつてゐる法然上人の歌である。寺からの眺望はまことに美しく、秋の夜などの月は、さぞや見ごたえのあることと思つた。この歌が、この

故あることと思つた。

国宝や重文級の仏像が、数多く宝物館に収められていた。この寺の古さがよく偲ばれる数々であつた。そして、巡拝の最後、この寺に参詣し得た身の幸福を、私はつくづく感じたのであつた。

五、盛んにしたい二十五霊場巡拝

二十五霊場は、ここに述べなかつた多くの寺がある。中でも総本山の知恩院、大本山の百万遍、そして上人生誕の地である誕生寺、上人配流の地の高松の法然寺と、天下に名だたる名寺がある。そして、多くの人が、これら大寺に参詣されていることと思う。それはそれだけに、充分意味のあることである。

しかし私は、それにも増して、余り人の訪れない、そして、実際には、上人が最も苦勞せられた霊跡を訪れて、祖師の鴻徳を偲ぶことが、いかに大切であるかということを、つくづくと身を以て感じた。そして、そうした寺は、時に荒廃してゐた。それは、誠に申し訳けないことである。

始めにも書いたが、二十五霊場の巡拝は、上人と共に



—誕生寺本堂—



—誕生寺正門—

に、その苦難と、教化の道を歩くことである。それは、頭で考えるだけでは、とうてい分らぬ別の信仰への実感を、味わうことができるチャンスでもある。私が参詣している時、二十五霊場のかたびらを持って朱印を頂いている人を何人か見た。このかたびらを着て、死出の旅にようという人びとである。尊い念仏行の一つであろうと、互いに合掌しあったものであった。

法然上人を顕彰する方法は、いろいろあると思われるが、二十五霊場巡拝は、その中でも重要なものの一つであろう。私はこの機会に、吉水の流れを汲む人びとが、一人のこらず霊跡を参拝され、上人の恩徳に報いられんことを念じて止まない。

お念仏と私

藤井実庇

(大本山増上寺法主)

私は真宗東本願寺派の檀家に生れ、両親共に念仏をよるこび、朝夕の勤行（正信念仏偈、和讃、お文）も行われたので、正信偈は小学へ入学の頃は、わけは分らぬまま暗誦するまでになった、そのような関係で、手を合せ念仏することは別に抵抗は感じなかった。二十二歳発心して行基寺山田淳応師を師匠として得度し、その年宗教大学に入学、仏教を学ぶことになり、道を求むることとなった。折しも大正十一年六月、鎌倉光明寺に於て椎尾弁匡先生の第一回共生結衆に参加、仏教とはこのように明るく生々した生活に即したものであったかと深い感動感銘をうけ、自らが求めていたのはこれであったと気づかされ、それが一の機縁となって生涯先生から御指導を頂く

ことになった。また当時、大学にては望月信亨、渡辺海旭、荻原雲来、椎尾弁匡、大島泰信、矢吹慶輝、加藤秀旭、山口察常、今岡達音、大野法道、石井教道、大村桂巖、岩崎敲玄、松田貫了、ニアナチロカ等の諸大先生の御教導をうけることが出来た。共生会のほか、光明会の別時がよく行われることとなり、土屋観道上人の行基寺の別時を最初に、笹本戒浄上人、田中木又先生、熊野宗純上人らの別時に屢々参加御指導を頂き、卒業後長野県諏訪組紫雲寺に住することとなり、唐沢阿弥陀寺の別時には欠かさず御手伝いし御指導をうけ、また松本の多田助一郎居士の御招きで松本にて行われる別時の御手伝いをし、特に藤本浄本上人からの御指導を頂いた。その他一々挙げることでできぬたくさんの方々の御導き、よき友達の励ましにあらうことのできたことは曠劫来のよるこび感謝である。「善知識は得道の全因縁なり」との釈尊の御言葉が、しみじみ味わえる。宗立布教講習所に勤務

(七年間)、仏教、宗乗をみなおし勉強することができた。伝統宗乗、共生会、光明会、それぞれの特徴があらわれているが、その中心は、釈尊、善導、法然と一貫し流通し来ったもので、それは選択本願念仏と頂いている。それを椎尾恩師は最も明かに示された。

阿弥陀仏の大願業力を強増上縁として念仏申す身とならせて頂いた。只今南無阿弥陀仏と申すこの念仏は、私が申すのではあるが、それは本願力のあらわれである。声に即して本願成就身が拝まれる。

「阿弥陀仏と称うるがわれらには真仏ともなり、香華灯明ともなる云々」(関通上人)「もはや、泥木塑像に望みなし、南無阿弥陀仏を以てわが本尊とす」「称うればすがたは声にあらわれて阿弥陀と申す仏なりけり」(徳本上人)のおことばはありがたい。如来は常に在してわれを導き護り下されている。

御本願は十方世界を救わんとするの願である。みんなの救われる道に於て、私もまた救われてゆく。「願共諸衆生往生安楽国」の高祖宗祖のお心をまたわれらが願として、日常生活の上に、更に社会の上に、同信同行同朋と手を携えて共に進ませて頂きたい。もはやこの世のい

のちも長からず、生死は如来まかせ、称名サンゲしつつ、今日今日をよろこび、今日為すべきことを為しゆきたいと願うている。

稲岡覚順

(大本山金戒光明寺法主)

私は今「念仏と私」との関係について考えて見ますと、念仏が私を救って下さるとか、私が念仏で救われるとか、念仏と私とを対立的に考えたり、二元的に見たりするものではなく、もはや私と念仏とは切り離すことの出来ない、一体の関係にあることに気づかされます。念仏が私を組立てている無数の細胞の中にしみ込んで、念仏が私の体質をつくっているのだとも申せます。念仏を離れた私の生命も、私の人生もないのだと考えています。

とは申せ私は朝から晩まで、晩から朝までつまり四六時中お念仏を唱え続けている訳ではありません。起床就寝の折、勤行の日課、食事の前後、一くぎりついた仕事のあと、その他随時随所に、お念仏の数遍は繰返します

が、長い一日に比べますと、ほんの僅かの時間にすぎません。

また私は十悪のかたまりのような者であります。十悪とは、身の三悪、口の四悪、意の三悪の総称ですから、私はこの愚悪のとりことなつて、右往左往している泥凡夫であります。

このように私の人格の中には、念仏と十悪、菩提と煩惱といった、全く異質の、全く矛盾するものが、ミックスされ、からみ合っているにもかかわらず、念仏と私との関係がわりないものであり、念仏を離れた私がないと考える、この不可解の事実をどううけとめたらよいのでしょうか。

「いつでもどこでも、念仏の中に生きることが、一番正しい信仰生活である。それは念仏が阿弥陀様のご本願だからである。従つてどの様な愚悪の者でも、この如来の本願力を強縁とするが故に、私がその仮救われるのだ」とうけとらせて頂くからです。

私の体質となつてゐる念仏とは、正しくこの信条そのものに外ならないのです。

この信条が私の血脈に流れ、細胞にしみこみ、ぬきさ

しならぬ私の体質となつてゐるからです。どの様に煩惱妄念の競い起る中にも、私の申す念仏が、私をその仮救い下さるとの確信にあるからです。

江 藤 澄 賢

(大本山清浄華院法主)

「いけば念仏の功つもあり、しなば浄土へまいりなん、とてもかくても、此身には思ひわづらふ事ぞなきと思ひぬれば、死生共にわづらひなし」(勅修御伝)——四苦八苦の人生、虚仮の世間にあつて、罪惡深重、煩惱熾盛の六十八歳の私にとっては、法然上人のご遺訓に従つて、ただ一向にお念仏するしかない。

行住坐臥念念々称名することによつて、日常生活の念仏化に徹し、念死念仏、念々往生、弥陀の本願力によつて、おのづから浄土への道を往生させて頂くのである。

然しながら相依相関、重々帝網の關係で成立している社会にあつて、お念仏が私一人の安心のためにとどまるならば、所詮、浄土往生はかなえられないであらう。私も救われ他人も救わるる道である、易にして勝なる万機

普益の口称念仏、凡入報土の道を人々にも信行して頂くよう伝えてゆかねばならない。

世人多くは、生きることに汲々として生かすことを忘れ、生かされていることに気付かない。

深くかつ遠く思はん天地の

中の小さき星に生まれて

湯川秀樹先生の歌である。故小笠原秀実先生は、

仏あり仏なしやは惑にて

いま見るものは仏み姿

と、自他二元の執われから離れ、不二の境界に到らねばと思う。

あの良寛さんは、「災難にあうときはあうがよろしく候、死ぬときは死ぬがよろしく候」と、二元に執着する自己のはからいを捨てて仏の方からはからわれるのである。

「ほのほは空にのぼり、水はくんだりさまになる云々」(勅修御伝)と。法爾自然、ただ一向にお念仏して、弥陀の本願力におまかせするのであります。

与えられた題名、与えられた枚数によって些か心境を語らせて頂きました。

宮本文哲

(大本山善導寺法主)

○大本山善導寺の宝物船板名号と

太平洋上の念仏

私は大正四年に宗教大学(大正大学)を卒業して、同年の七月にハワイ開教区に赴任した。船は春洋丸であったと記憶する。船上で遇然渡辺海旭先生に会った。「加納じゃないか。君もこの船で布哇に行くのか。この船には日置黙仙禅師と言う禅宗の大和尚が乗って居る。禅師は此度桑港で開催される世界宗教大会に日本仏教界の代表として出席するのだ。僕は禅師を見送りに来たのだ。君がこの船で布哇に行くのだから紹介しておこう」と言いながら一等船室につれて、方の如く紹介して下さった。

同船では私と同じ三等船客で、ハワイのカワイ島ワイメアの禅宗寺に赴任する、竹中開教使が乗っていた。同君とはすぐ友達になった。三等船室はとてもむき苦しいので、よく禅師の一等室にお邪魔して、お茶やお菓子

頂いた。

横浜を出帆して数日たった或日、禪師は私を呼んで、「加納(私の旧姓)君に是非やってもらいたい事がある」と言いながら、傍の箱を指して、「この中には小さい紙片に『南無阿弥陀仏』と書いたのが三万枚入っておる、これをお念仏称えながら海に流してくれ」と頼まれた、何のためだと尋ねたら、「あの広い太平洋では沢山人が怨をのんで死んでおる、其の人達の菩提を弔うためだ」と言う。「俺は禪坊主だから念仏は申さんが、その老婆の大悲心を感じて引きうけてきた。船の中で浄土宗の君に会うのも仏様のお導きだと思ふ。是非これをやってくれ」と言われて私は、二つ返事で引きうけた。

尚禪師は随行長の山上宗玄師に、観音様の像を紙に刷ったものを、観音経を読みつつ海に流す様に言われた。山上師と私は人影のうすくなる暮れ時を待って、後甲板に出て、山上師は観音経を、私はお念仏を至心に称えながら太平洋の真ただ中に流した。あの時の感謝感激は、七十余年たった今でも忘れない。

当山には、「船板名号」と言う宝物がある。この宝物については頗る神秘的な御利益のエピソードがあるが紙

面に制限があるので残念だが割愛する。しかし私の言いたい事は、善導大師の化身に勸化されて、至心に念仏して危い命を助けて頂いた同行衆のお念仏も、私が禪師の仰せによって至心に回向させて頂いたお念仏も、共に三心具足のお念仏であった事を固く信ずるのである。合掌

石井真峯

(大本山光明寺法主)

自分の父のことを書くのは少々口はばつたい気がするが、よくお念仏をとなえた人だった。朝夕のお勤めの時はもとより、平素、人と話をしている間も、数珠をつまぐりながら口を動かしていた。その伴の私はとてもその真似は出来ない。只父の亡くなった年を越して二年になることは一つの親孝行かと思っている。

むずかしい題名を『浄土』から与えられて当惑している。いい年になって今更どうなるものでもない。ひたすら、念仏をとなえ、浄土へ生れさせて頂く以外何もすること、言うこともない。本の題名を忘れ、書架にも見当たらないが、その本に極楽往生に関し多数のかたの意見

が発表され、その中で多くのかたが浄土往生を肯定して
いたと記憶するが、只二人だけ、西方浄土へ生れること
などお伽話の類だというような意見があったと思う。そ
ういう意見も参考となる。それはそれとして、私は命終
したら浄土へ生れさせて頂く。そのためには常日頃つと
めて多く念仏を唱えたい。「一念なほ生る況んや多年を
や」とあるが、多くとなえることは、いろいろな意味で
よいことだと思う。

しかし極楽往生して楽隠居をしようとは思っていない。
発願文の中に「かの国にいたりをはって、六神通を
えて、十方界に入つて、苦の衆生を救摂せん」とある。
六神通は天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏
尽通で、超人的な能力をもって苦しむ衆生を救済してや
ろうという大変な誓願である。自戒のために四弘誓願の
偈を記してこの短文を終る。

- 一、衆生は限ないが誓って度いたいと願う。
- 二、煩惱は辺がないが誓って断ちたいと願う。
- 三、法門は量ないが誓って知りたいと願う。
- 四、菩提は上ないが誓って証りたいと願う。

一 一条智光

(大本山善光寺大本願法主)

私は小学校時代京都光照院門跡にお世話になっていま
した。時の住職石橋聖海尼公は、他所様よりの手紙(当
時は巻紙)の行間の白い所を丹念に切り取って、六字名号
を書かれるのを日課としていられました。それを或時は
川施餓鬼の折に流し、或時は死者の棺の中に入れるよう
有縁無縁を問わず差し上げられ、又病人の枕辺に置いて
念仏することを進めていられました。子供心にも良いこ
とと思い真似たものであります。次には尼衆学校へ入学
後、知恩院大殿の常念仏を見聞して身の引きしまる思い
をしたこと、日曜ごとに阿弥陀堂の御仏の尊容を拝しな
がらお念仏を申した時の有難さを、今もありありと思い
出されます。

右のような環境の中にあつて、浄土宗義の講義を聞き
宗祖上人のご開宗へのご苦勞、この事言わずばあるべか
らずの御信念、唯一向に念仏すべしのみ教えを受け、一
途に若き日の純粹な真剣さでお念仏を申したものです。

しかし寺に帰り法要法要の明け暮になると、申し訳ないことながら、次第に懈怠多く機械的な念仏に変わり行くのを情けないと思うばかりでした。参詣者の声高らかに申す念仏に警策を受けた思いをしたこともありました。それが昨年火災に逢い歴代住職より伝えられた大切な品を失い申し訳ない思いに涙した時、心からお念仏が迸り出で以来、「念々称名常懺悔」のみ教えをかみしめながらお念仏をさせて頂き居る今日であります。

この年になってお念仏によって悲しいこと嫌なことが、心より薄らいで行くことの有難さを知り、改めて、「信は力なり」と仰せられた法然上人のお言葉に合掌する私であります。

南無阿弥陀仏

金田明進

(大本山増上寺執事長)

もしお念仏の縁がなかったら今日の私はないでしょう。私は東京の築地の眼鏡製造業者の三男として生まれました祖母は熱心なお念仏の信者でした。そのころ東京麻布に常行念仏の道場がありました。繁成寺と言う寺で

念仏の指導者は深山法運上人です(のち鎌倉光明寺百一世となられました)。繁成寺は俗称カンカン寺と言われたように一日中お念仏の鉦の音が絶えなかったのです。私の祖母も深山上人の感化をうけてお念仏をよく申し、起居ふるまいに念仏を称えていたのを覚えています。私は生れて間もなく父を失い叔母夫婦を両親として育てられました。ところがこの母も祖母にならって若くしてよくお念仏を称えました。私が小学二年のころ、父は巡査でしたが結核にかかり病床の身となりました。母は原宿から居を麻布に移し外勤をしながら父を看病しました。麻布の住居はかの念仏道場に程近い所でした。母は勤務から帰って病夫を看護し、夕食がおわると、父と私を残して繁成寺へお念仏に参詣するのです。それもお百度をふむと申して念仏を唱えつつ広い本堂の廊下を往ったり来たり、三、四十分はかかるでしょう。私は一夜母にせがんでお百度をふみについてゆきました。病夫の平癒の祈願もこめられていたのでしょう。しかし父は私の小学二年の暮れに亡くなりました。髪をふり乱さんばかりにして念仏のお百度をふんだ母のおもかげが今に忘れられません。父の死後間もなく私は深山老師に入門して、その寺

に母と共に世話になりましたが、朝に夕に常行念仏の道場に育ちました。母も又病み、病院を転々として、私が小学校を卒えた年に他界しました。

幼い孤児の私にのこされたものは、祖母からの念仏、母の念仏、そしてこの道場に培われたお念仏でありました。道を求めて念仏生活へと言うより、祖母から母へ、そして深山老師に打ちこまれた念仏の孤児が私であったのです。以来七十年、私のいのちをささえるものはこのお念仏のおかげです。今、毎月二十五日に五十余名の同行とお別時をつとめることも、御本山にお仕え出来ることも、みなこのお念仏のおかげです。

水谷 幸正

(仏教大学長・文庫)

「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」(一枚起請文)というおことばの、ただには甚深の意が含まれている。道元禪師のいう只管打坐の只管と同意をみなしてよい。いまその内容に深くたち入って論ずる余裕はないが、一言で分り易くいえば、念仏は手段ではなく

目的である、ということになる。

もちろん「念仏申すにはまたく別の様なし、ただ申せば極楽へうまると知りて、心をいたして申せばまいるなり」(つねに仰せられる御詞)、「念仏には甚深の義ということなし、念仏申すものは、かならず往生すとするばかりなり」(四十八巻伝)とあるように、往生浄土が目的であって、念仏はそのための手段である、ということにもなる。しかし、あらためて言うまでもなく、念仏を申すということの中に往生浄土が包摂されているのであって、念仏を申す、そのことが私どもの目標なのである。

そこで、念仏を申すことの内容、言いかえれば、念仏を申しているときの心的状態が問題になる。口さきだけの念仏では蟬の鳴音とかわからない。心になんらかの憶いがこめられているはずである。仏を憶念して一心不乱であるのか、あるいは無心であるのか。なにかを願い、なにかを念じているのか。

救い給えという願生の念仏なのか、ありがたいという感謝の念仏なのか、という古くて新しい問題がここから生じてくる。この問題は議論のための議論に陥り易い。なぜなら、いずれの念仏にしろ、まず念仏せずには

おれない、という心が前提になければならないからである。私は思う。その心こそ懺悔の心なのである。

「念念称名常懺悔」（善導大師）と説かれるように、懺悔の無い念仏はから念仏である。まず、申しわけない、という気持ちがあつてこそ、おのずから願生の念仏となり感謝の念仏となるのである。懺悔心は安心の第一の至誠心にあたる。

懺悔と感謝の念仏を申すことによって至誠心なるものを味わいつつある今日このごろである。

真野の孝信

（八幡市正法寺住職）

寺に生れた私は、胎児の頃から、お念仏（称名の声の

遠く群峯の上に現はれた夏雲は、さまざまの美しい形を青空に書いて、私共の眼を楽しませる。

然し、その時、その群峯の背を歩んでゐる登山者達は、その雲の中につつまれて、雲の大きさも形も訳らず、ただ漠々たる白霧の中に、迷ひ彷徨（さまよ）つてゐるのである。

そのやうに、人間の時代社会といふものも、それを遠く隔った後代になって、是を顧みると、その状況や意義は、はっきりと理解する事が出来るが、事実、その時代の中に生きてをる者には、却つて、漠々（ばくばく）たる白雲の中に居るやうに

時代の意義も、その前途も見透しがつかぬものである。

現代の我々も亦た、その一つの白雲に包まれてゐるのであるが、我々自らは現在その只中に立つてゐるが故に、却て、その姿も方向もよく分らないで日を暮らしてゐる。——然し、それにも係らず、時代は黙々として其進むべき方向にぐんぐんと進んで行つてをる。それをよく見極めることが大切である。

—真野正順先生の文章—
（『浄土』第一巻十月号、
「現代の行方」より抜粋）

中で成人させていただいたと申してよいかと存じます。

勤行時は申すまでもございせんが、幼少の頃の思い出の中で、地震があると、父は私達寺庭の者を屋外の畑地に避難させると、大いそぎで本堂に登り、ギク！ギク！ミシッ！ミシッ！と堂舎の揺れ軋む中で、木魚をたたいて高声に念仏し、私達が泣きべそをかきながら呼び叫んでも、余震のおさまる迄は、決して出てこなかった事が印象的であり、又、母が、真夏の清風を「ああ、極楽の余り風！ナムアマミダブツ。ナムアマミダブツ」と、小声でつぶやくように悦んだのも印象的で、母は八十二歳、父は米寿を目睫の間にするまで、それぞれ長患いもなく、静かにお浄土に帰らせていただきました。

私は、厳格だった父の計いで、中学に入ると、法類の伯父の寺で小僧生活に入る事になり、常に光明会のお別時に参加いたしました。その後大学に入る頃から、共生会の尋常念仏の大事身に沁み、殊に恩師椎尾弁匡大

僧正から、「万年曆」の付箋で、お名号の御染筆を賜ったことが、元祖大師御法語の「現世をすぐべきやうは、念仏の申されんかたによりて、すぐべし」を一層大切な度世の御指南と頂く仏縁となり、今日に及んで居ります。

一寺の住職としても、また宗門の大事に関与する折も、特に口称十念の中にこそ、世の全事が帰結すること、具体的な事象、事案を通して有難く頂戴して参りました。左右何れに道をとるべきかに迷惑する難事に処する時、仏前に拝跪し、「心存^ニ助^ニ給^ニ」真剣に念仏して仏の御教示をいただく事に致して居ります。仮令、一時的な誤解や批難があっても、時の流れと共に、次第にそれは霧消し、素直な認識と寧ろ共鳴をさえ得られる御法語御指南の有難さを、確信をもって世の人々にお勧め致したいと存じます。私の告白でございます。

お 念 仏 と 私

勢至丸さまに寄せて

いちだぜんじゆ
一田善寿

(併号、牛畝)

練供養

本年四月十九日浄土門主の御代理として、法然上人御誕生地の岡山県久米南町の誕生寺の御両親追善大法要の大導師を檀徒五十名を連れて勤めさせて貰いました。山門には高々と、大導師の私の名が横幕に張られていました。

導師の名掲げし花の山門に

牛畝

そして岡山県の文化財になっている二十五菩薩練供養が、今年は父時国公の木像を興にのせて、袈裟堂より誕生寺へ肅々と菩薩の仮面と衣装をつけた人々で繰りひろげられたわけです。

—法然上人御両親追善大法要—

(昭和五十五年四月十九日、於誕生寺)

ながながと花の参道の練供養

牛畝





—誕生寺二十五菩薩練供養—

花日和を授かって参道には人あふれ、色々な屋台出店でひっくり返るような賑やかさでありました。

二幡の 棕

本堂の左裏に誕生棕があります。両幡の棕とも呼ばれ、法然上人が誕生の時、白い旗が二流れかかったからであります。

二幡のかかりし棕の青葉かな

牛 畝

神功后皇が応神天皇をお産みになった所は、福岡県の宇美町で、私はこの宮の氏子として産まれましたが、産が宇美八幡宮と呼ばれるようになりました。

産井水湧き八幡の楠青葉

牛 畝

天皇が誕生の時、八流れの幡が楠にかかったから八幡宮と申すようになりました。天皇の幡は、闘争の幡で、法然上人の幡の場合、平和の幡であり、軍神となられたのに対して、念仏門の元祖さまとなられたのです。

片目川

法然上人九才の時、父時国公は夜討を掛けられました。その仇を、玩具の弓で右の目を射ぬかれたのであります。仇は前に流れています川で、矢傷を洗ったのであります。それよりその川の魚は片目のない魚がすむようになりましたので、片目川と申します。

古事聞けば悲しき春の片目川

牛畝

曾我兄弟の仇討が建久四年でありますから、四十九年後のことです。玩具の弓で仇の目を射抜く程の腕の持主なれば、刃を磨かれたら必らず仇討されたでしょう。そうなれば兄弟に先立つこと五十年昔に、日本仇討の元祖となられたに違いないわけです。

しかし、仇を討つでない、死んで行く父を救ってくれ、母を導いてくれ、憎いにちがいないが仇も必らず救ってくれよ、との父の遺言によって観学得業の弟子となり、父母も仇も救うことの出来る人となられたのであります。曾我兄弟は折角仇討をしましたが、仇の子のため

に討たれ、母を泣かせ、恋人を泣かせることになり、五月二十八日に雨が降りますと虎ヶ雨と申します。虎とは大磯の虎御前で、兄祐成と深く契った女でしたが、祐成が討たれたのでその悲涙が雨となったのであります。

花売の虎ヶ雨とぞ申しけり

暮情

しかし、上人は仇を討たずして、仇同志がともに歩む道をお開き下さったのであります。

都原

誕生寺の近くに都原と申す地名があります。そのあたりに「仰釈の灯」と刻まれた灯籠があります。上人の母が、十五才の勢至丸様を送られた後に、比叡山をこの地より灯を入れて拜まれたあとと伝えていきます。

吾子^お恋ふて佇ちし芒の都原

牛畝

夫と死別され、たった一人の子供と訣れられ、ただ一人となられた母上の淋しさいかにわかりだっただしょう。

法然上人鑽仰会……その足跡と展望

行運に当った『浄土』の創刊

村瀬秀雄

(小田原市常念寺住職)



法然上人のご法語に、殆んどの人が念仏の法門を信じ、直ちに念仏一行の信仰生活に入るのをみると、念仏の法門が如何に時代に適した教えであり、末代の人々の願いに叶った法門であるかということが判る、と仰せられた一句がある。法然上人鑽仰会が一案の興望を担って発足し、『浄土』が創刊されるとたちまちにして全国に広がったということも、当時はそれだけの機縁が成熟し、まさしく行運に当たっていたからであった。

昭和九年八月頃、真野正順先生は国訳一切経の一環として大智度論の訓読と註解を受けもち、その原稿を執筆

するために山中湖畔に滞在していた。八月も秋だった頃に偶然にも友松円諦、岩野真雄、佐藤賢順の三氏が湖畔の山荘に落ち合うことがあった。四人の話題は自ら仏教復興の将来をどうするかの問題に移り、この気運を永続させるためには何をなすべきであるかの実践論にまで及んで活発な議論が続いた。ここにいる仏教復興とは、同年三月一日から十七日まで十五回にわたってラジオ放送された友松氏の法句経講義が終わってから勃然と起った気運に対して、誰いうとなく使われ始めた言葉であった。それ程この放送は聞く者に大きな感動を与え、各方面か

ら非常な好評を博した。予想以上の成果について友松氏自身の言葉をかりていえば「講義の反響はわれながら驚くほどで、まことにただ感激と感謝の二つの文字しかない。何万通かの手紙を見せていただいて、自分はほんとうに生まれ甲斐があり、仏門に入ってよかったと、今更ながら、周囲の人々に黙謝したことである」というのであった。

もっとも仏教復興という言葉は前年頃から流行していた文芸復興を振った言葉である。左翼文学とナンセンス文学の時代を経て私小説が台頭し、次第に純文学への追求が強まったところに文芸復興なる言葉が生れた。この頃の世相は後になって狂った季節と呼ばれている通り、訳のわからぬことが続いた。例えば昭和八年だけを見て、日本が国際連盟を脱退し、最初の防空演習が行われた。坂田山心中以来自殺が流行し、大島三原山の火口に身を投じて死んだ者だけを数えてみても、この一年間に九四四人にも達していた。それでいて東京音頭が流行し、街の人々は「ヤートナ、ソレ、ヨイヨイヨイ」と歌い興じていたものである。仏教界についていえば左翼からも右翼からも無視されていたし、仏教界自身は徒らに社

会主義とファシズムとの間を徘徊するばかりであった。たまに口を開く者があれば、その者の議論は「宗教は阿片なり」の一言で片付けられていた。もし法衣を着て横町を歩く僧侶があれば、家の中から大声で罵声を浴びせられるという時勢であった。暗い谷間にあって隠忍を強いられていた人々が仏教復興という声を聞いた時に、どのような感慨をもってこの言葉を迎え、いかに安堵を憶え、意欲をもやしたかは想像に余りあるものであった。

このような時に前記の四氏が、この気運をじっくり握りしめ、更に進展させる方策について、祈るような気持ちで話し合った。これがやがて鐵仰会設立の計画となったのであるが、佐藤賢順氏は設立までの経過を次のように語っている。

「昭和九年の秋になると、学界や教界の人々を招いて再々の会合が催され、われわれは何をなすべきかについての具体策について協議を重ねた。その結論が法然上人鐵仰会の設立であった。こうした発願が同志の間で進められていることが一度伝えられると、まだ公には発表していないのに、各地方、各方面から精神的物質的の援助が翕然と集ってきた。誠に涙ぐましい献心献財であり、内護外

護である。献金も忽ち一万を突破した。労力を捧げようとの篤志は切らない。これも上人鑽仰会なればこそである」

同じ年の秋もふかくなった頃に、庶務部長里見達雄、教学部長中村弁康、真野正順、岩野真雄の諸氏を中心に約三十名が当時の明照会館に集まり、正式に法然上人鑽仰会という名称をきめ、同時に設立準備委員会を結成することに努めた。翌十年一月には宗務所別館に仮事務所を開設し、二月十二日には機関紙「法然鑽仰」創刊号を発行した。三月一日には中里介山を招じて法然上人の人



浄土

正同號



法然上人鑽仰會發行

—『浄土』創刊号及び第二卷正月号—
(いずれも井上正春氏の装丁)

格を語る座談会を開いた。こうして四月には待望の『浄土』創刊号が五月号として発行された。すると全国の各地から協議と激励との声があがった。事務所には府県別会員数一覧表が貼ってあったが、大阪府、山口県の会員増加がトップを競っていた。同年七月号の編集後記によれば「躍進また躍進で、本号〆切までに会員数は五千を遙かに突破、六千に垂んとする発展振りである。創立三ヶ月にしてこの躍進である。更に旬日を出ずして一万にしてみせると一同武者振り勇ましく活躍している」と記し、次いで十一月号には「毎月予定よりも会員増加率が

法然上人鑽仰會發行

第二卷 正月号

ずっと多くなるので、月中に申込まれた読者には、月号売切れのご通知をしなければならない始末で、誠に申し訳ない次第です」と断り文を出している。まさか旬日ではなかったが、数年後には会員数が一万一千を超えた。雑誌の発送については、六割以上が支部宛に括めて郵送されていたから、支部長たる住職が更に会員の各人に配ったわけである。残りの雑誌は会員宛に直接郵送したのであるが、これらの会員といえども支部長の幹

浄土 十一月號



— 今から四十五年前、昭和十年十一月に刊行された

『浄土』第一卷十一月号の口絵—

旋紹介によって入会した者であった。つまり宗侶の一人一人が鑽仰会を自分の教化活動であると認め、進んで支部を結成し、一人でも多くの会員獲得に努力していたのである。だからこそ会員が急速にふえ、会が目覚しく発展したのであった。会としても支部の行事を後援することに努め、よくスライド写真を持って出掛けて行った。

創刊された十年度の誌面をみると椎尾弁匡、望月信亨、矢吹慶輝の三博士をはじめとして真野正順、中村弁康、佐藤賢順、武田泰淳その他の諸氏が執筆し、宗外からは佐藤春夫、十一谷義三郎、岡本かの子、中里介山、藤原咲平、三木清、川路柳虹等の諸氏の名がみられる。その中で春夫氏は朝日新聞に「法然上人別伝、掬水譚」を連載し、後で単行本として会から刊行した因縁があり、最後まで定期的に寄稿してくれた。また一定の読者層をもつようになった吉田絃二郎氏の随想は、十二年十一月から始って、毎号に必ず寄稿してくれた。真野先生の編集方針はあくまでも一般大衆のための信仰雑誌にすることであった。例えば読み捨てられた『浄土』があったとしても、これをお手伝さんが拾い上げた場合に、何か一つは彼女の興味を引くものがなくてはならぬという

ことであつた。何故ならこれによって彼女が信仰に入る縁を結ぶかも知れないと期待されたからである。従つて誌上には信仰と直接関係のない小説、漫画、笑話、寸言

黒谷法然上人傳

佐藤春夫



『浄土』第一卷六月号から連載がはじまつた

佐藤春夫「黒谷法然上人伝」の題字と挿絵―

等を必ず掲載していた。また歌壇、俳壇、信仰相談も好評であつて、毎月投稿の一部しか掲載できなかった。

『浄土』の人氣のもう一つは十銭の信仰雑誌というところにあった。しかも会費は年額一円であつた。昭和の初めに現代日本文学全集が円本として売り出され、自動車の台数が急にふえて東京市内一円平均のタクシーが生まれた。この円本と円タクが文化の大衆化として歓迎されていたので、年額一円の会費は耳慣れた響きをもっていた。定価を十二銭とし、会費を年額一円二十銭と改めたのは十四年七月号からであつた。しかしこの値上げも物価の高騰に追いつけるものでなかつた。小売店から返本された分は、そのまま赤字となつた。もつとも用紙が配給制になつてからは小売店に出さなくなつた。ともかく昭和二十年五月の空襲で事務所が焼失するまで『浄土』を発行できたのは、全く宗務所から交付される補助金を年々増額してくれたおかげであつた。またおかげといえ、配給で割り当てられた用紙の量を確保してくれ、公定で売ってくれた大同用紙店の友情があつた。そして断りもせずに、最後まで印刷を引き受けてくれた大日本印刷の好意もまた忘れることができない。

鑽仰運動の展望

大正デモクラシーが定着した昭和初期、日本の思想界はどうやら一つの方向に向って歩み出そうとしていた。

しかし、それはやがてファシズムへの急坂を転がり落ちることになるのだが、その間わずかの期間に、日本の暗い将来をいち早く予見された先覚者たちによって、一斉に唱導されたのが「仏教ルネサンス」であった。その口火を切ったのが昭和九年三月から放送された友松円諦氏の聖典講義『法句経』であった。それは数十万の人々をラヂオの前に釘づけにするほどの反響があった。そしてそれは仏教復興の波となつて日本全国に滔々として行きわたつたのである。

友松氏はその年の十一月に高神覚昇氏や真野正順先生

竹^{たけ}
中^{なか}
信^{しん}
常^{じょう}

(大正大学教授・文博)

の参画のもとに、新しい仏教理念を掲げて「真理運動」を結成した。真理運動のその後の展開はよく知られていることだが、創設の功労者の真野先生が真理運動から離れて、翌昭和十年二月、法然上人鑽仰会の機関誌「法然鑽仰」を創刊されたことは余り知られていない。雑誌『浄土』第一号が発刊される三カ月前である。

こうした創立当時のことは本誌の他の稿で述べられているが、ここで言いたいことは、真野先生が友松氏の真理運動から離れて、なぜ独自の道を歩まれるようになったかということである。それはむしろ思想的、信仰的なことからあつて、友松氏との交情は終生いささかの違和のなかつたことは、これまたよく知られているとお



である。

それなら、思想上、信仰上にどのようなちがいがあったのか。このことは筆者の付度^{ふたて}ではあるが、友松氏の目ざした仏教復興はその『法句經』講義によく示されているように、もう一度原始の積尊の仏教に還るといふこと、そうしてそこから改めて現代の仏教の在り方を考えようということにあった。したがって友松氏は、「宗派」といった仏教の後代的な形態を否定し無宗派を主張し、さらには真理運動大阪講演会では「浄土」の存在を否定し浄土宗門から追われる結果を生んだのである。こうした友松氏の思想傾向に対して、真野先生がことさら「法然上人鑽仰」を標榜^{ひょうぼう}したということは、真野先生自身の仏教——ひいては浄土教信仰に対する確信的態度の表明にはかならない。その意味では、両者が袂を分ったのはむしろ当然といわなければならない。真理運動もそれなりに評価されるべきであるが、法然上人鑽仰会のその後の展開は四十五年の歴史が物語るようにこれも評価すべき点が多々あるが、そのことは他の稿に述べられているはずである。

本稿では、こうした生い立ちを持つ鑽仰会が今後いか

なる道を迎るべきかを考えてみたい。それには真野先生が友松氏と袂を分った最大の理由と思われる「法然鑽仰」ということに注目しなければならない。なぜならそれは、日本仏教が他の国々の仏教にはない特色として持つ「祖師信仰」だからである。

仏教がインド、中国、日本と流れて来た間にそれぞれの性格を形成したことはいうまでもないが、インドの部派仏教、中国の宗派仏教に対して、日本の仏教は「祖師仏教」と性格づけられよう。祖師はむしろ「宗派の祖」であり、したがって宗派が先行するが、しかし同じ宗派でも中国のそれには「学派—学統」の意味が強い。それに比して日本の宗派はそれを開いた祖師に対する人格的信仰が目立つ。特に、仏教が真に日本の民衆社会の中に定着し、本当の意味での「生きた仏教」となった鎌倉期に新しく開かれた宗派では、各宗祖への崇拜がさかんである。浄土宗の御忌会、真宗の報恩講、日蓮宗の御会式など、年々おこなわれる行事はいうまでもなく祖師を対象としたものである。現に、近來の日本仏教界では祖師の忌日、生誕、開宗を記念する行事がさかんである。浄土宗が昭和四十九年におこなった「開宗八百年慶讃」、五

十五年の「善導大師千三百年遠忌」、そして五十七年の「宗祖生誕八百五十年」など、次々に企画され、うしろ向きにはあるが相当の効果をあげている。他宗においても祖師鑽仰はさかんである。

こうした日本仏教——くわしくいえば諸宗派の祖師信仰を現代に掘りおこし、しかもそのことを真正面から標榜したのが真野先生であったことを、われわれは銘記すべきである。

今さらいうまでもなく、日本の仏教は宗派を抜きにしては考えられない。いいかえれば日本では諸宗派が相い寄って「日本仏教」を形成しているのである。「全日本仏教会」なるものがあるが、実質は各宗派の寄合い世帯であり、いわば一種の「組合」にしかすぎない。各地にあるそれぞれの「仏教会」も結局は全日本仏教会のミニ版であり、花まつりと税金対策をその主な仕事とするにとどまる。だからといって筆者はこれら通仏教的なものに貶下したり否定したりするものではない。それはそれなりに存在理由があるのである。しかし、言いたいことは、金仏教というか通仏教というか、とに角「仏教」という統一的名ものはいわば一種の「思想」であり「理念」

「別の子紙さふらはずこの外におくふかきことを存せば二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし……」

と上人が一枚起請文を記された時には、正しく理解よりも信仰を、会得よりも服従を要求して居られたのである。世相を鋭く見て取った上人は後年の下剋上の風潮が早くも萌芽を發してゐるのを知ってこの教化があつたのであらう。禍（わざわい）を早く二葉のうちに摘み取つて置かうと企てるのは実（げ）にすぐれた事どもである。人ははじめ分厘（ふんりん）のくひちがひには気づかず、にそれが後に大きく延び拡がってからやと禍根（かこん）を發見するのである。——この事でさへ智者でなければできない。

——佐藤春夫先生の文章——

『浄土』第二卷三月号、

「念仏偶記」より抜粋

であるが、人々の悩みをやさしく医やしてくれるものではないということである。悲しいとき、嬉しいとき、悩ましいとき、苦しいとき、本当に一緒になって悲しみ喜び悩み苦しんでくれるのは、単なる教理教説や理念などではなく、われわれと同じ血のかよった生身の人間であらねばならない。われわれが近い過去の歴史の中で持ったことのある偉大なる仏教者——つまり祖師であらねばならないのである。日本人はよきにしろ、あしきにしろ義理と人情に生きている。相手を自分と同じ「人間」としてすべてのものを包摂しようとする。相手の痛みをみづからの痛みを感じ、自分の悲しみを相手に投げかけてゆく。そうした心情のうちに生きて来た民族である。俳句が生れ和歌が詠まれるゆえんである。それだからこそ仏教信仰も法とか教えとかよりは現に自分の前に姿をあらわし、共に泣き、共に喜んでくれる「ひと」を相手にする信仰、専門的にいうと「依法」ではなく「依人」の信仰なのである。そしてその最も手近な相手が「祖師」なのである。そしてさらにいうならば、祖師の信仰を現代に生かす人（それが具体的に菩提寺の住職であるならば理想的なのであるが）ということになる。

そこで、具体的に、法然上人讃仰会の今後の在り方は、うしろ向きの記念行事もさることながら、前に向って、雑誌『浄土』及びもろもろの出版物を大いに出し、さらにひと頃おこなわれた「浄土友の会」を頻繁に催すことである。ことに望むらくは讃仰会同人が何よりもまづみづから法然上人を讃仰する——つまり法然上人の教えと信仰をみづからのものとし、それをおのれの生活の上に生かして行くべきであらう。

幸いにして、日本仏教が祖師信仰を中軸として展開してきたことは、とりもなおさず法然上人讃仰会の趣旨が生かされてきたことであり、あえていうならば、そうした展開にいち早く先鞭づけられた真野先生の意図が、今にして全仏教的に拡大されたことにはかならないのである。

こうした状況に立つわれわれとしては、いまさら回顧だの展望などという必要はない。みづからの置かれた状況を正確にとらえて、出版活動も大切であるが、それにも増して、祖師信仰の基に横たわる心情、つまり人々との血の通った交流——「出会い」の場と機会とを数多く持つように努力すべきである。

中村弁康・真野正順・佐藤賢順・佐藤良智

四先生の想い出

父・中村弁康のことども

なかむら こん りゅう
中村康隆

(大正大学名誉教授)

父中村弁康は、明治十七年五月九日、清水市清水実相寺で祖父母弁応・くらの次男として生まれ、昭和三十四年七月三日隠栖地木更津市桜井専念寺で病没した。行年七十五歳二カ月であった。

弁応は三河渥美郡泉村（現渥美町）村松の農家の出身で遠州榛原町川崎安楽寺で得度し芝山内一円室祖義誉弁良僧正の付法弟子としてその学寮主にもされ、また義誉の法兄増上寺章誉智典大僧正にも随侍し、その紫道具衣

（惜しくも開宗八百年時光明寺十夜会随喜の折に紛失）や印章などを拝受しているが、維新の動乱を避けて明治二年実相寺に入った。父はこの祖父が五十の声を聞いてからの子で、しかも前年七月長男を一歳四カ月で失っていただけに鐘愛されて育った。父が晩年まで奔放不羈なお坊っちゃん気質を失わず、野人的な生涯を送ったのもそんな育ちからかも知れない。その反面祖父から三人の兄弟子（安西承信・渡部真戒・中村弁慈三師）以上に喧しく漢籍や



—故中村弁康先生—

經典の素読を仕込まれたらしく、父は四年制尋常小学二年に編入され高等科四年を終えると名古屋の教校・東海支校に進んで宗侶の資格をとり、上京して明治義会中学を明治三十六年三月卒業して、宗教大学進学間もなく祖父の中風の悪化で呼び戻され、母をめぐって翌三十七年五月寺を継いだ、その認証のおりた翌月、祖父は七十一歳でこの世を去っている。

こうして学業半ばで住職した父は翌春母と共に寺に幼稚園を始め、それが当時の町長で檀頭の共鳴を呼んで翌春、町営幼稚園開設へと委譲し、専ら寺で生花・茶道・謡

曲・仕舞・作陶などの文化活動に励み、傍ら同宗寺院を説いて子供会活動を興し、また各寺に人事相談所を開設し、民生委員の前身の方面委員を始めたという風な地域活動を盛んに行なった。また大正初年には町内各宗五カ寺連合の幼稚園も作った。

その父が教化活動に情熱を燃やすようになったのは大正六、七年頃岐阜の本誓寺の光明会の別時会に参加し、山崎弁榮聖者によって信眼を開かして頂いてからであった。八年から毎冬別時会を興行し、聖者亡き後は真生同盟の土屋観道上人・共生会の椎尾弁匡先生・真理運動の友松円諦師らを次々と招いて檀信の教化に努め、大正十二年からは浄土宗議会に出て以後六期二十四年永続議員として活躍し、昭和六年十二月から浄土宗教学部長を二期六年勤め、その間布教講習所や信行道場を興した。また昭和十八年から大本山増上寺執事長を三期勤めて、昭和二十五年五月永年の糖尿が悪化で辞任するまで、大島・椎尾両僧正に仕え、殊に昭和二十年五月二十五日戦災による増上寺炎上には最後まで本堂に踏み止まって雨と

降る焼夷弾と戦い、戦後公園地の大本山への払い戻しにも力を尽したのであった。

その間、昭和四年五月から一年二カ月に亘って万朝報の長谷川主筆や西湖山さん、それに現増上寺藤井法主などの勧めでその宗教欄の「日曜講壇」を連載し、教学週報社から『寺院における教化の実際』（昭和六・一〇）を著わし、教育部長時代、連年布教方針や教化資料・トラクト類を出刊し、また増上寺出版部からは『信仰読本』（昭和九年）を出し、その年真野正順先生を中心に里見達雄先生らと共に「法然上人讃仰会」の結成に協力、翌春雑誌『浄土』が発刊されると殆んど毎号執筆し、特にその『信仰問答』は後に一本（昭和十八年）に纏められた。知恩院の『華頂』誌に連載した『日常勤行式講讃』も讃仰会から出された。その他『法然上人の信仰生活』（昭和十年）『講話一枚起請文』（昭和十一年）、『法然上人とその信仰』（昭和二十三年）、前田聰瑞・大野法道両先生とその共著『浄土宗読本』（昭和十五年）（再版山喜房昭和四十六年）なども同会の出版であった。その他国民新聞社刊『法然上人』（昭和十年）、第一書房刊『法然聖語読本』（昭和十二年）の出版などの文筆活動の外、数多い信仰座

談会や各地の講演またラジオ放送などに精魂を傾け、また満州事変や上海事件などで再三中国に浄土宗派遣使節としても出向いた。父の著作を読むと特にトラクトなど自分の中から湧きでるものを紙面にたたきつけるような意気込みが感じられたものであった。

戦後の混乱期での『浄土』の編輯・発刊には、言い知れぬ苦勞があった。いまでも眼をつぶると、増上寺の執事長室の古びた机の上で、アルコールの水割りを手に、こつこつと編輯から校正まで、父がひとり苦勞していた姿が、まぶたに映じてくるのを禁ずることができない。手伝いを申し出ても、父は「よいよ、君は君の苦勞があるから」というのであった。

父は糖尿病との闘病の苦など少しも洩らさなかったが、最後はそのため失明し足先の壊疽を起し敗血症で不帰の客となったのだが、その木更津の療養先でも保育園を作ったり、好きな謡曲を教えたりした。父は最後まで自由人であり野人であった。そして自分の道を歩き続けた人であった。

真野正順の思い出

真野龍海

(大正大学教授・文庫)

私が『浄土』に関わりを持ったのは、昭和二十四、五年から、約七、八年で、終戦後の苦難から、除々に立ち上りつつある時代、つまり、再建時代であった。故藤田寛雅先生と竹中先生とが中心で、藤田先生亡き後は、竹中先生と、その竹中先生も、一時、闘病の人となられた。上大崎の枕頭で、色々と打合せをしたことであった。編集から事務発送まで私一人で、整理のため、深更に及ぶことも珍らしくはなかった。

このような状態に対して、父は、ほとんど口を容れるというようなことはなかった。あのやかましい人が、どうして、自分の育てたもののあり方について、とやかく言わないかが、むしろふしぎに思えた。竹中先生にいうと、「正順先生は、はじめは細かに言うが、まかせて

しまつたら、そうなのだ」と言われた。おそろくその時は、竹中先生が、中心で、同人の方々が、やっておられるので、余計な口出しをしなかったのであろうが、論客にしては珍らしいことだと思っている。だから、『浄土』に関して、私と父の思い出は、むしろ少い。ただ一言、「あのように苦労しているが、やがて自分が、一翼を担ぐようになるからだろう」と語っていた言葉くらいである。

父の話は、人を引きつけ、また、話しに油がのってくと止ることを知らない。家人は、また熱でもでないかと、おろおろするのを尻目に、二時間でも、三時間でも続く。そのレコードはNHKにおられた摩尼清之氏であったが、話を聞きにこられたのが分からないくらい



—故真野正順先生—

話しこんで帰られた。学生に対しても、どうしてあんなに、長く丁寧に接するのであろうか、自分の病弱を考えてはしいのにと家人は心配するのが常であったが。

なにしろ、ふだんは、午前中は原稿、書見。午後は、たいてい休んでいたが、その休みながらも、絶えず本を買ってこさせて読み、メモをつけながら考えていたようである。亡き後、いろいろメモ帳を見てみると、日付けと、例の、判かりにくい飄々とした字で細かく思索の跡

が認められてあった。だから、一度、客に接して、話しが、その方に及ぶと、堰を切ったように、それが出てくるのであろう。

昭和二十八年に、幼稚園を始めてから、週に父が一回、私が一回、童話をする事となった。私は、少年のころから、学生時代まで日曜学校などでやっていたから、父には負けない自信があった。ところが、父は、童話で児童達を「痺れさせた」のである。いつも、二十分から三十分に近い話であって、幼児の童話は、七、八分から、十分止りという常識を、はるかに破るものであった。ふつうの人では、とても、名人でも、続くものではない。幼児は、自分が興味がなければ、話しにはついてこないし、騒いで、付添の先生が、手を焼くものである。当時五歳児ばかりだったせいもあるにしろ、まだ園舎も出来ぬままに、畳の上で聞かされた彼等は、話が終ると痺れがきて、動けないものが続出した。父は、一週間の間、次の童話の構想を練っていて、それをやるのである。怪談物が得意で、「誰も来ないのに、ドアの把手が、がちりとあいた……」と、セスチュアたっぷりに話すと、子供達は、身を固くして聞いていた。大雪

が降ると、今日は子供達に、よく来たといって、お菓子をやっとくれといって、優しい心づかいをした園長であった。その第一回の卒業生が、今年は、その子供が入園されて、先頃の運動会に、自分も、卒業生競技にいっしょに参加していたのを見てみると、あの童話に、瞳を輝かせたのを思うと、とても感無量である。

父の話といえば、ユーモアとウィットに満ちていたが、私には忘れられぬ一言がある。植木いじりが好きで、私に手伝わせながら、ふと手を止めて、私の方を見て、「だいぶ白髪があるじゃないか、博士も近いね」と笑ったことである。

最後に、上記のメモの、絶筆となった頁からの抜書きを見てみたい。その年の夏には、「雖で貫くような痛みが

あるが、誰にもいわないでおこう」とある。心配させまいとしてであろう。私も、いつになく、その夏は、顔が赤らんでいるのに気がついたが……。

「真実に磨き出さん為に、真実の御名を呼ぶ」

「つつましい生活を送ろう。」

ただ悠々と自然に和するため……

淡々として風の如く

木の葉が窓を吹きぬけてゆくように

財が私の中を流れ去ってゆくように

淡々としてこの生を過ぎよう

かくてこれ財用無量である。」

あいさつ

法然上人讃仰会代表 佐藤密雄

『浄土』が発刊されて四十五周年となりました。文字どおり日本人が、千数百年來信じてきた確信を打ちくだく敗戦を中軸として、思想・政治・宗教の激変興亡を経験してきました。よくぞ生きつづけたと、一入の感慨を禁じ得ません。『浄土』の創設者真野正順先生、これを支持し実行せしめた、当時の浄土宗の要人たち、参画して弊会の実践運動に挺身した諸先輩の、そのほとんどは故人となられた。

発行時代の盛栄が維持されていらないことは、同人の強く反省するところでありましたが、初心は守りつづけています。本誌の生きる宗教界の、特に直接する政治的支配から独立して、自由を確保することは、かたくなに守られてきました。同人諸氏とともに、初心を忘れずに、さらに前進したい、と考えます。

ありし日の父・佐藤賢順

佐藤成順
（大正大学専任講師）

私のところにある『大藏經』や『国訳一切經』を読んでいると、ときどき欄外の余白に鉛筆を記した父の筆跡に出会うことがある。西洋哲学が専門であった父が、仏



—故佐藤賢順先生—

教のこんな種類のものまで読んでいたのかと感心するし、何年か前に父もこの本を読んでこの部分に関心をもちこんな書き込みをしたのだな、と思うと、黒い漢字ばかりが並んだ中に、なにかしら生きたものを感じてほっとした気持になる。

昭和二十年、何月だったかは忘れたが、私が中学一年生で、東京に空襲の激しいころだったことだけは確かだ。父が神田の本屋街を歩いていると、ある書店の前で本屋の主人がリヤカーに本を積んでいた。見ると『大藏經』だった。全巻そろってはいなかったが約半分の五十巻はあった。父が「その本をどうするのか」と尋ねると、「今夜あたりこの店も空襲で焼けそうな気がする。本をできるだけ少なくした方が焼けたときに消火活動が

しやすいので、どこかに移すか、処分しようか、と思っている」との答えだった。父は、それではもったいないと思ったし、寺に『大蔵経』がなかったたので、さっそく交渉して、相手の希望通りに運賃にタバコ錢程度をつけて引き取る話がまとまった。この話を聞いて私は、こっちだって今夜焼けるかもしれないのになんと物好きなことだろうと思った。この本だったか別の本だったかはつきりしないが、私も疎開先に本を運ぶのを一、二度手伝ったことも覚えている。その当時の横須賀線は、横須賀に軍港があったために、一般人の乗車を制限していた。子供の私には乗車券が手に入らなかったたので、苦心してな

阿弥陀様の前に立ってみよ。其の両脇には観音、勢至の両脇士が侍立し存します。いづれも阿弥陀様の満徳のうち、最も著しいものを、即ち観音菩薩は大慈悲門、勢至菩薩は大智慧門を、開いて示すのである。またお釈迦様の御像の両脇には通例文殊と普賢の二菩薩が侍立し在します。文殊は智慧を、普賢は行願を、これも亦それぞれお釈迦様

んとか電車にもぐりこんで寺と疎開先を往復したこともあった。

それからすでに三十五年が過ぎた。私も仏教の研究にたずさわるようになり、そのときの『大蔵経』には恩恵をうけている。戦後しばらくして『大蔵経』が再刊されたので、欠けている巻を一冊づつ補充し、父が死んでからは私がそれを引きつぎ、昨今、ようやく百巻にそろった。思えば、全巻そろうのに随分永い年月がかかったものだ。私にとっては、父の思い出のある『大蔵経』である。

の限りなく人格の深き一端を象徴する。これら三尊は各々別なのではなくて、相即して一仏に帰一するものである。一言で言へば、これは仏の教の理想は情意と智慧と、実践と認識と全く帰一し相即した所にあることを示すものに外ならない。

— 佐藤賢順先生の文章 —

『浄土』第四卷正月号、

「仏を焚く」より抜粋

く 佐藤良智詩集よりく

若きいのち

花ばなの

地上に咲くのは美しい

宇宙のどこかの星の世界に

花が咲いているであろうか

わたしたちの住む地上にだけ

花ばなが咲いているのであろうか

それは、わからない

ただ、この地上に花の咲くのは美しい

人びとが花を愛するようになったのは

いつのころからであらう

花を愛するようになった

人間というものは、また、美しい

人間にも花が咲いている

幼な児は花だ

幼な児のえくぼは

花の花びらだ



—故佐藤良智先生—

少女も、また、花びらだ
にっこり笑った花だ
つぼみ花だ
いや、すみれの花だ

青春を讀える
若きいのち
これこそ花である
咲きほこる人生の花だ

若いいのちは
讀えても
たたえきれない
麗わしい花だ

詩人でもあった佐藤良智先生の、暖かい慈愛に満ちた言葉。ありし日の面影が彷彿として、今、なぜか涙があふれる。

(法)(然)(上)(人)(鑽)(仰)(運)(動)(へ)(一)(言)

飯田 信弘

(四日市光蓮寺住職)

法然上人鑽仰運動は、念仏門の使命である。

人間は本来孤独なものである。しかし、それに堪えねばならぬ。阿弥陀仏がお救い下さるという絶対他力の教えのもとに、日々の生業に骨身惜しまず精進することである。

石井 俊恭

(東山高等学校長)

漆間 徳然

(岡山県久米南町誕生寺住職)

法然上人のころと生きようは、あらゆる制限を超えてある。それを今の社会の教育の場にかすには、それに携る一人一人が法然上人の姿を今の世のためにしなければならぬと思う。と同時に、各学校が行う宗教行事・教職員研修会では、より強い協調と意義向上をはかる要があると思う。鑽仰はより多くの宗教情操雰囲気の機会を、如何にもつかだと思う。

法然上人鑽仰会創立四十五周年、心よりお慶び申し上げます。今こそ世界平和の基は、「お念仏」でなくてはならない時に迫られております。今後ともその浄土布教の一端として躍進されんことを期待申し上げます。

合掌

上田 祐規

(鎮西高等学校長)

大橋 俊有

(京都文教短期大学長)

鑽仰会が発足して四十五年、僕が正大学の浄土学を卒業したところである。随分昔のはなしたが、考えてみる

と折角浄土学を専攻したのに、京都の役人になり、教育長や社会事業、交通事業の管理責任を務めてきた。つまり、お寺の外回りの仕事をしてきた。いわば外道の僕にとっては、外野であっただけに鑽仰会に教えられるところが多大であった。そして今も、若し法然上人御在世なれば、現代に即した弘法活動をしていられることを信ずるのは、鑽仰会の影響と外道をさまよったおかげだと思っている。

小川 金 英

(花巻市松庵寺)

学も徳も無い私には、『浄土』が法然上人のみ教えを信仰に導く唯一のしるべでした。創刊以来、毎月の『浄土』誌を貪る様に読みました。そしてささやかながらの私の布教上に大きな力となり得ました。昭和十四年、鑽仰会評議員として啓蒙宣伝の役を負い、昭和十八年頃より請わるまま創作童話や随想みたいな愚作を登場させて頂きました。

こんなに良い信仰誌が、同志だけにのみ購読され、寺院壇信徒一般に普及されぬはどうした事かと残念に思っ

た事でした。創刊以来四十五年と知って、今更の様に法然上人鑽仰会の皆様に今日までの御苦心の程、敬意と感謝を申し上げます。

戦災によって、昭和二十年以前のもものは焼失しましたが、その後の雑誌をひもといて懐しさを感じています。『浄土』の論説や教化材は、今も生きていてこの老僧を励まし、そして活動させてくれています。

北川 一 有

(東京・鳥越長寿院住職)

法然上人鑽仰会創立四十五周年をお祝い申し上げます。

永い年月、ことに悪夢の戦争中と物資不足の戦後の困難を乗り切って、元祖法然上人のみ教え、「生かされる喜びに感謝する」お念仏の同信同行の輪をひろめるために精進努力されました先輩諸師に敬意を表しますと共に、益々、法然上人鑽仰会の発展に会員の皆様とご一緒に歩ませて頂くことを念願しております。

合掌

楠 美 知行

(青森市正覚院住職)

一、法然上人鑽仰会の会員読者を増強されたい。それには会員読者一人が、それぞれ一人を推薦することをも提唱します。

二、表紙の「浄土」の文字がカタ苦シイ感じがします。もっとソフトな文字表紙で、見ただけで読む意欲にすれば如何でしょう。

柴 田 敏 夫

(横浜市蓮勝寺住職)

鑽仰会創立四十五周年と聞き驚きました。私達が学生の時に、真野正順先生がはじめられたのであります。ともかく、この様な運動はもとよりわりあいに遅々として発展しないですね。牛の歩みの如く、うまずあせらずに、歩みつつけて頂きたいわけです。

須 藤 隆 仙

(函館市称名寺住職)

明治の文芸評論家高山樗牛は、「日蓮主義」というものを唱えました。私は法然上人の鑽仰運動は、「法然主義」の宣揚であると思っております。渡辺海旭先生は、法然上人の十大特色として、

- ①大慈悲宗教 ②実践的 ③万人共通 ④直截簡明
- ⑤純粹 ⑥決定思念 ⑦無形式 ⑧没我渴仰 ⑨人間中心 ⑩日常仏教

等を挙げられましたが、このような法然上人の勝れた宗教性を、今日益々発揚させるべき必要があると思えます。煩瑣な仏教教義の積み木遊びでは、人々は救われません。法然上人のみ教えを本当に食べてもらって、それで腹をふくらませてもらうよう、そういった運動が鑽仰運動だと思います。よろしくお願いします。

松 川 文 豪

(埼玉工業大学長)

「法然上人の人生観・宗教観」——その主張と生き方を如何様に現代の人々にアピール・共感させるかであると

思います。一般の方を対象にする幅とやわらかさと、多様性と、斯界一流者による作品・演出であるべきでしょう。権威とか、美とか、躍動とか、金は、人を魅惑するものだと思います。これらを駆使できる方法を作り出したいものです。「小さくてもよい、光り輝く」運動・存在であらしたいものです。思い切った変容は如何でしょう。

合掌

松 濤 弘 道

(栃木市近竜寺住職)

いつも月刊『浄土』誌の発行等意欲的な鑽仰会の御活動に敬意を表します。今後益々御発展下さいますよう祈念致します。

合掌

山 口 諦 存

(明石市光明寺住職)

善導大師一三〇〇年の遠忌は、中国の香積寺において、画期的な日中合同の大法要として修せられた。末徒

の悲願成就、まさに宗門の一大快挙であった。

ついて明後年には法然上人ご降誕八五〇年を迎えるに当って、偏依善導によって浄土開宗をせられた、上人庇誕の意義を現代の人々に、どのようにうけとられるか、『浄土』に課せられている今日の使命は大きい。

かつて『浄土』には若さがあり、重厚な内容をもつ高い格調があった。半世紀近く生きつづけてきた『浄土』をねぎらい、更に飛躍を懇望する次第。

人生が本当に幸福であるか、不幸であるかは、唯だ「往生」し得る確信を以て進むか、若しくは「往死」の状態のまゝにくだらない人生を空費して行くかの二筋道である。

人があゝ云った、かう云ったで、ぐらつくやうな信仰は信仰ではない。畢竟念仏が足りないからである。本当の「南無」の経験が無いからである。一度本当の「南無」が出さへすれば……一切解決である。

— 中村弁康先生の文章 —

『浄土』第一巻八月号、

「往生と云ふこと」より抜粋

表紙のことば

「ざくろ雑感」

かきてたべつみさいてたべわりてたべ

さてその後は口も放たず

くれないの七の宝を諸手して

おし戴きぬ人のたまもの

良寛さんは石榴を大変好んだらしい。知人からざくろを七つ貰った時によんだ歌だというが、ひとり孤庵に坐して、ほっほとうまそうにざくろを喰べている姿が目に見えるような歌だ。

土屋 正男

中国では古来、石榴は子孫繁栄のしるしとして絵にも文様にも喜ばれていることは、北斉の文襄帝が新婚の時、妃の母君が家孫の繁栄を祝う意味で石榴二個を献じたという故事によっている。外は石のようにかく、内に多子を蔵することの吉祥である。

むろん良寛さんはそんな他国の故事に頼着なくただざくろの味が好きだったから口も放たず喰べほうけたことだろう。赤く透けて光る寶石のような粒々を口いっぱい頬張るのはほんとうに旨い。ちよつびり酸っぱくて甘い味は童心にかえる思いがする。

濃緑の葉の重なりの中に秋の陽に映えた黄金色の実を重たげにつけた姿はゆたかに美しいが、初夏の頃、朱色のやや筒形をしたつややかな花を、数多く綴った樹姿も梅桜とはちがった異国的な美しさがある。

漢の孝武帝の時、張騫が西域に使い、塗林安石国からその種子を持ち帰ったのが東方に伝えられた始めとされ、安石榴花という名がいつか柘榴と縮まり、石榴の音の訛ったのがザクロだというが、シルクロードブームのさかんな折柄、さて塗林安石国とは現代の地図上何処のあたりに位置したものであったろうか。先賢のご教示を得ることができたら有難いことである。

ざくろについては、こんな伝説を聞いたことがある。

昔、鬼神の訶梨帝母は八百人の子を持ちながら毎日一人づつ人間の嬰兒を把とえては喰べていたので、釈尊は嬰兒の母の歎きを深く憐

み、訶梨帝母の子供の一人を法力で隠してしまった。訶梨帝母は狂気のように暴れまわって我子を探しもとめたので、釈尊は八百人の中の唯一人が居なくてさへ悲しいものを、むさむさ愛児を奪われた親の苦しみを思い覺らせて、訶梨帝母に石榴の実をあたえて、一人の子の肉に代えさせ、一切の衆生に益を与えることを誓わせたという。訶梨帝母は日本の鬼子母神で、今日では子供を守護する神となっている。

年々歳々ざくろは確実に花咲き、実を結ぶけれど、自分は歳々年々同じことの繰り返しに終っていて、一向にこれといった稔り少い毎日ではあるけれども、それでもたとえわずかでもいい、何かを積み重ねているであらうことを信じて生きていきたい。

くれないの七の宝を諸手して
おし戴きぬ人のたまもの

鐵仰会のあゆみ

近代における仏教運動は、明治の廃仏毀釈による危機意識が礎となつて、仏教護法の覺醒的動きとして展開した。そして、大正から昭和にかけての運動は、デカダンス的な風潮と、やがて戦争へ傾斜していく時代背景のなかで、訓話解的な伝道ではなく、生命のかよつたもの、原点に還らうという運動として展開していった。それは「積尊にかえらう」「宗祖の真精神に魅らう」という時代的要求のなかで、一方には積尊を中心とした「真理運動」が起り、他方では本会の創設があつた。昭和十年のことである。本会は、大正大学教授真野正順先生、大本山増上寺執事長中村弁康上人を中心として、大正大学、宗門関係者、「法然上人鐵仰」の趣旨に賛同する一般政財界の人々の参加を得て、同年四月に旗揚げした。その当時、不定期あるいは季刊の信仰雑誌は二、三刊行されていたが、本格的な月刊誌

は稀有であつた。雑誌『浄土』が、本会の機関誌として華々しくデビューしたとき、仏教界はもとより宗教界、一般出版会でも多に刮目され、誌面も「信仰のみちびき」から「念仏信仰の真髓」などにいたるまで、また広く文芸を通して、法然上人の崇高な教えが、縦横無尽に飾り立てられた。この『浄土』に、文豪佐藤春夫氏が法然上人の伝記『掬水譚』を、中里介山氏が『黒谷上人夜話』を連載し、また岡本かの子女史や吉田絃二郎氏が常時執筆し、宗内というより、一般各界に多大の反響を呼び、「仏教ルネッサンス」という言葉が流行したのもその頃であつた。

その後、わが国は戦時体制に突入し、思想・信仰の弾圧など、暗い重苦しい世相となつたが、本会は「法然上人鐵仰」の旗印のもと、念仏信仰を根幹として、大衆運動を展開した。その指導者が、佐藤賢順・佐藤密雄・佐藤良智・中村康隆・竹中信常の各師であり、書店や各駅売店に並び、読者を魅了した『浄土』の編集に携わつたのが、道瀬幸雄・東慈道・村瀬秀雄・成田有

恒（寺内大吉）の各師であつた。

やがて戦争末期に入り、東京を中心に全国各地は焼土と化し、会員も散逸、『浄土』の刊行もおぼつかない状態となつた。しかし、関係者の努力により、終戦直後の混乱期にも東京芝公園の焼跡に鐵仰の火が消えることなくともされたのである。焼失した会員カードを整理し、大八車に『浄土』を積んで発送し、セールスしたのも、つい昨日のような感慨である。

その後、真野龍海・安居香山の両師が参画し、佐藤行信・佐藤良純・佐藤成順・長谷川宣丈・原裕各師の若い力が加わり、戦後の鐵仰運動および『浄土』の刊行を担つてきて、はや四十五周年を迎えた。

不惑も過ぎて、やや停滞している本会ではあるが、維持会員あるいは「法然上人鐵仰」の、有縁の理解者に支えられて、今日まであゆみ続けられたことをなにより感謝したい。普導大師一三〇〇年遠忌・法然上人生誕八百五十年慶讃に因みて、『鐵仰運動』のあらたなる飛躍を念じてやまない。

（宮林昭彦）

二 編集後記 二

○昭和十年五月、真野正順博士、中村弁康上人を中心として、はじめて発刊された月刊誌『浄土』は、本年をもって四十五周年の足跡を、けみしたわけです。当初、その正当の四月号を記念特集号とする予定でしたが、善導大師一三〇〇年遠忌慶讃等、諸般の事情から、本号すなわち『浄土』第四十六卷十一月号をあえて「法然上人鑽仰会創立四十五周年記念特集号」として、読者諸兄にお届けする次第です。土屋正男先生の滋味に富んだ表紙絵は「柘榴」。そして弊会同人で、かつての本誌表紙絵の担当者松澤達文画伯にとくお願いして、「法然上人誕生の図」を豪華口絵として飾っていただきました。本文八十ページの内容も、増上寺御法主藤井実応台下と弊会同人代表佐藤密雄博士の記念対談をはじめ、「法然上人を憶う」という特別コーナーを設けて、法然上人鑽仰運動の盛り上げを、来る

べき法然上人誕生八五〇年の慶讃へ向け、諸先生のご執筆を仰ぎました。どうか、豪華特別体裁で刊行いたしました『浄土』を、今後の読者諸兄の念仏信仰増進の一助としていただければ幸いです。なお、これを契機として、一人でも多くの皆様が、『浄土』を手にとっていただき、法然上人鑽仰運動への暖かいご参加をしていただければ、重ねて幸甚とするところであります。丁度本誌が発送されます頃は、十一月八日（土）、東京・田町の笹川記念会館において、既報のごとく「法然上人鑽仰会創立四十五周年」の記念式典が催されているはずですが、この機会を読者諸兄と共に喜び、私たちはさらに身を慎しみ、心を引きしめて精進努力して行くつもりです。

○未熟なる編集作業、遺漏の多い事務整理——鑽仰会の会員の皆様への不備不足を、誌面を借りて改めてお詫びいたします。その責任の重さをひとしと心にかけて、重ねて今後の精進努力を、私は誓います。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、五〇〇円

（送料不要）

浄土 四十六卷 十一月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十五年十月二十五日 印刷

昭和五十五年十一月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇三 振替東京八二一八七番

昭和十年五月二十日
昭和五十二年十月二十五日
第三種郵便物認可
昭和五十二年十一月
月刊
発行

第四十六卷

第十一号

